
薔薇の騎士

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇の騎士

【Nコード】

N8622H

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

若い恋人オクタヴィアンとの恋の日々を過ごす元帥夫人。だが彼の目の前に美しい少女ゾフィーが現れた時彼女は別れの時が来たことを察して。リヒャルト・シュトラウスの名作です。誰も死なない、けれど少しずつ何かが死んでいく、そうした作品です。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

薔薇の騎士

第一幕 止まらない時間

白い静かな寝室であった。絹と羽毛の大きなベッドがありその上にも白い天幕がある。ベッドは穏やかな乱れの後を残している。寝台の近くには三重の中国式のやはり白のカーテンがありその陰には女もののやはり白い服がある。この服もまた絹のものであった。貴族の服であった。

部屋中央にはやはり白い木のテーブルがあり同じく白い椅子が二つ置かれていた。そこに金と白の豪華な服に身を包んだ少年が座っている。胸元はまだ開いていて汗が少し残っている。少女を思わせる青い目の顔は中性的であり湖の青をその白い顔に見せている。唇は紅く小さくやはり少女のそれである。その身体つきもまた中性的な感じであり黄金色の髪は豊かで見事な輝きを見せている。秀麗な貴公子であった。

彼の名はオクタヴィアン。このオーストリア帝国の名門ロフラーノ家の嫡子であり今年で十七になる。ウィーンでも評判の貴公子だ。その彼がテーブルに腰掛けてこれまた白いカップを手にしてココアを飲んでいる。その黒がまた部屋の白を映えさせていたのであった。

「小鹿よ」

オクタヴィアンはうつとりとした顔でまずはそのココアを一口含む。それからベッドの方に顔を向けて言うのであった。

「素敵です」

声もうつとりとしていた。

「貴女はいつも素敵です」

「素敵なのは貴方よ」

その白いベッドから豊かなプラチナブロンドの髪にアイスブルーの瞳をした妙齡の美女が起き上がった。乱れた寝巻きを着ておりそ

の顔はたおやかな気品に満ち溢れ整った顔にもその気品を溢れさせている。それでいて濃厚な色香を漂わせそれは声にも含ませていた。彼女はマリー・テレーズ。ヴェルテンベルグ公爵夫人であり夫が元帥であることから元帥夫人とも呼ばれる。やはりウィーンの名門に生まれ修道院で教育を受けた後十七で公爵の下に嫁いだ。今は三十二歳、その美貌はさらに艶やかさを増しているというのが周囲の意見である。本人はどう考えているかはわからないが。

「カンカン、貴方の方が」

オクタヴィアンをカンカンと呼ぶのであった。

「いえ、それは貴女の方です」

またオクタヴィアンが言ってきた。

「貴女がどれだけ素晴らしいかは僕だけが知っている。御主人も知らないけれど」

「主人のことは言わないで」

それは断るのだった。

「今はいないのだから」

「では話を変えます」

オクタヴィアンは彼女にそう告げてきた。

「貴女とは何でしょうか」

「貴女とは？」

「そうです。貴女と僕は何なのか」

それを元帥夫人に問うのだった。

「しかも意味があるのか。言葉に過ぎない。ですが」

「ですが？」

「その言葉にも意味がある。眩暈に引き寄せ、憧れ、愛撫、身を焦がし炎となる」

次々に言葉を述べていく。

「僕の手が貴女のところに行くように貴女に引き寄せられます。それが僕なのです」

「それが貴方なのね」

「はい」

また元帥夫人の言葉に頷くのだった。

「僕は貴女にとって坊やなのかも知れません。けれど貴女を見ることも聞くこともできなくなったら僕はどうすればいいのでしょうか」

「貴方は私のものよ」

その彼に対して元帥夫人は静かに述べた。

「恋人なのよ」

「はい、そうです」

その言葉にも頷く。

「けれどどうして昼間が来るのか。僕は昼が憎い」

こうも言う。

「昼は何の為にあるのか。昼には貴女があの人、いえ皆のものとなる」

それを嫌そうに告げる。

「僕は夜が欲しい。永遠の夜が」

そう言うが夜は来ない。朝になるだけであった。

「ベルが」

この時ベルが聞こえてきた。

「鳴った。一体何が」

「お客様ね」

元帥夫人はそう考えた。

「誰かしら」

「手紙や挨拶状を持って来た使いの者でしょう」

オクタヴィアンはこう考えた。

「ザーラウから？ ハルティックから？ それともポルトガルからか」

この時代のオーストリアはマリア・テレジアの時代である。プロイセンとの対立を背景に積極的な外交を行っていた時代である。だから各地の人々が行き来していたのだ。

「何処からか」

「あっ」

元帥夫人が声をあげると扉をノックする音が聞こえた。夫人は扉の方に顔を向けて問う。

「誰なのかしら」

「僕です」

小さな男の子の声であった。

第一幕その二

「フリッツね」

「はい」

声がまた返って来る。

「チョコレートを持って来ました」

「そう、入って」

「わかりました」

「けれど少し待って」

だがここでそのフリッツを制止する。それからオクタヴィアンに顔を向けて言うのだった。

「隠れて」

「隠れるのですか」

「剣も持ってね。ベッドの上に置いたままにしないでね」

「わかりました」

「女の寝室に置きっぱなしにするものではなくてよ」

大人の女の柔らかな忠告であった。

「わかったわね」

「はい」

オクタヴィアンはそれに応えながら部屋のカーテンの中に隠れる。元帥夫人はそれを見届けてからあらためてフリッツに声をかけるのだった。

「入って」

「はい。それでは」

それに応えると扉が開いた。そうして黄色い派手な服を着た小さな黒人の男の子が入って来たのであった。その手にチョコレートが入れられた碗を持って。

「ココアですのでこれにしました」

「そう、有り難う」

フリッツのその言葉を受けて微笑む。

「ああ、そうそう」

ここでまた言うのだった。

「置いたらそれで下がっていいわよ。ご苦労様」

「わかりました」

チョコレートを置いて部屋を後にする。それを見届けてからベッドを出てカーテンの向こうに隠れているオクタヴィアンに声をかけるのだった。

「もういいわよ」

「そうなのですか」

「ええ、出て」

また彼に声をかける。

「一緒に朝御飯を食べましょう」

「はい、それでは」

二人はカーテンの側で並びそこからテーブルのところに来た。そうしてそこに二人並んで座りそれから仲睦まじい様子でココアとコーヒーを楽しみだした。その中でまたオクタヴィアンが元帥夫人をうっとりとしながら言うのだった。

「小鹿よ」

「カンカン」

二人はうっとりとしてこう呼び合う。オクタヴィアンはその中でまた言う。

「元帥は今クロアチアです」

出陣ではなく軍事視察だ。元帥ともなれば多忙を極めるものなのだ。

「そこで熊や山猫を狩っているのかも。しかし僕はここで小鹿を」
「だから主人のことは言わないで」
それは拒むのだった。

「昨日夢に見たのだから」

「昨夜ですか？」

「そう、昨日」

その美しい顔に憂いを漂わせて答える。

「夢は自分の意志で創り出せるものではないのだから」

「そうだったのですか」

「ええ。うちにいたわ」

こう告げる。

「馬や人達の騒がしい声がして。けれどそれで目が覚めて」

「嫌な夢ですね」

「夢は嫌なものであることの方が多いわ」

これもまた彼女にとってはそうなのであった。

「どうしてもね」

「遠くクロアチアにおられる筈なのに」

「人の行き来は早いもの」

こう呟く。

「けれどさっきのベルは」

「それに今」

部屋の向こうから物音が聞こえたのだ。

「まさかあの人が」

「だからクロアチアにおられるのでは？」

「いえ、違うわ」

夫人は不安に覆われた顔になったその音がする方を見て言うのだ。
「った。」

「だって衣装部屋の方からの音よ」

「それがどうかしたのですか？」

「他の方なら控え室の方から来られるわ」

この屋敷の造りではそうなるのだ。

「けれどあの人だけは衣装部屋から来られるのよ。夫婦だから」

「では間違いない」

オクタヴィアンは危機を察した。それで慌ててまた剣を手にとって今度は部屋を出ようとする。だがそれを夫人が止めるのだった。

第一幕その三

「そっちは駄目よ」

「どうしてですか!？」

「控え室なのよ」

「そうなのだった。」

「召使達が大勢いるから。こっちへ」

「今度は反対側に案内する。しかし。」

「駄目、音が近付いて来るわ」

「今度は何処から」

「もう衣装部屋に入ったのね」

音が近くなったのでそれがわかるのだ。

「隠れるしかないわ。だから」

そう言ってベッドの陰に案内する。

「この中に隠れて。いいわね」

「はい。じゃあ」

「まずは危機をやり過ぎさない」と

今度はこうオクタヴィアンに告げた。

「何もならない。だからこそ」

「まずは危機をやり過ぎすのですね」

「そうよ」

また彼に対して告げた。

「私はナポリの將軍ではないから立つべき場所に立っているわ」

なおナポリは後にハプスブルク家の得意とする婚姻政策によりハプスブルク家のものとなる。マリア・テレジアが娘を嫁がせたのである。彼女はこの時オーストリアの偉大なる国母であったのだ。

「召使達が気を回してくれればいいけれど」

「そうも願う。」

「あらっ」

だがここで元帥夫人はふと気付くのだった。

「あの人ではないわ」

「そうなのですか？」

「ええ、男爵様と言っているから」

明るい顔になってきた。その顔でオクタヴィアンに対して述べる。

「違うわ。よかったわ」

「そうですか。しかし男爵というと」

「あの馬鹿でかい声は」

元帥夫人は衣装部屋の方から聴こえるその声にそば耳を立てて探りながら述べる。

「オックスだの」

「オックスといえますと」

「私の従兄のレルヒエナウ男爵よ。何の用かしら」

それはわかったが疑問があった。それは。

「どうしてわざわざ領地からこのウィーンまで。あつ」

「また何か」

思い出したような顔になる夫人に対して問うた。

「あれよ。ほら、一週間前のことを憶えているかしら」

「私ですか」

「そうよ、一緒に馬車に乗っていた時」

オクタヴィアンに対して話す。

「一通の手紙が届けられたわね」

「そんなこともあったでしょうか」

その辺りのオクタヴィアンの記憶は曖昧なものであった。彼はいぶかしむ顔で首を傾げている。それが何よりの証拠であった。

「そうよ。私も手紙の内容は憶えていないけれど」

「それはまた」

「一体何の用かしら」

また考える。

「まあいいわ。それはそうとして」

オクタヴィアンに顔を向けての言葉であった。

「何なの、その格好は」

「奥様」

見ればオクタヴィアンは召使の格好をしている。若い娘のメイドの格好だ。黒い服に白いエプロンと帽子のそれが実によく似合っている。少なくともそれは彼を男には見せてはいなかった。

「私はこの家に入ってまだ間がありませんので」

「ふざけないで」

メイドの礼で一礼するオクタヴィアンに対しての言葉だ。だがその顔は笑ったままだ。

「とにかく。男爵が来るから」

「お通ししてとは言っていないのに」

「強引な人なのよ」

ここでは困った顔を見せる。

「だからね。今はメイドのふりをしてね」

「わかりました。それでは」

「いやいや、奥様」

その野太くて馬鹿でかい男の声がもう扉の前に来ていた。夫人はオクタヴィアンを隠してからそちらに顔を向けて応える。

「どなたですか？」

「貴女の忠実な僕です」

一応言葉は丁寧である。

第一幕その四

「入って宜しいでしょうか」

「少し待って」

見れば服は寝巻きのままである。乱れを慌ててなおしてガウンを羽織る。こうして何とか体裁は整えるのであった。少なくともフランスでは朝この格好で客人と会うのも普通だというからこれでもいいだろうと思ったのだ。マリアーレテジアの時代によく長年の宿敵フランスとも友好関係になったのである。これもまた婚姻政策でだ。嫁いだのはあのマリー＝アントワネットである。

「いいわ。入って」

「わかりました。それでは」

夫人の家の使用人達が少し憔悴した顔で扉を開ける。どうやら男爵を押し留めるのに必死だったらしい。

その男爵だが白い髪を被って赤と金の豪華なフロックコートとズボン、白い絹のブラウスに靴下、それと編み上げ靴といったいで立ちだ。如何にもといったフランス風の格好である。

結構変わった印象を与える感じの男であった。顔は粗野な趣に満ちているがそれでも中々端整で太めではあっても生気が感じられにこやかに微笑んでさえいる。黒い目の光も強く鼻も高い。大柄で背が高くやたらと強そうな印象も見せる。彼がそのオックス男爵である。歳は三十五、元帥夫人の父方の従兄である。

「お久し振りで」

まずは三度フランス風のおじぎをしてみせる。その動きも中々さまにはなっている。

「お元氣そうで何よりです」

「奥様も」

顔を上げてからこう夫人に述べる。そこからまたおじぎをする。

「朝に申し訳ありません」

「いえ、それは構いません」

このやり取りは社交辞令であった。お互いそれはわかっている。

「フランスではそれが普通のようにすし」

「フランスのマナーでいくのはどうかとも思いましたが」

ここでオックスは少し複雑な政治背景について言及した。

「何しろあそこはヴァロワ家の頃からの関係ですからな」

「それは確かに」

これは元帥夫人も知っていることだ。オーストリア、即ちハプスブルク家とフランス、即ちブルボン家との関係はマクシミリアン一世の頃よりの激しい対立関係にある。ヴァロア家が断絶しブルボン家になってからもそれは同じであった。オーストリアとフランスは欧州における宿敵同士でありその対立が欧州の政治の一つの基軸なっている。彼等の間にプロイセンという共通の敵ができるまでそれが続いていたのだ。なおこの時代オーストリアにとって最大の敵はそのプロイセンであった。オーストリア継承戦争においてもそれに続く七年戦争でも激しく争っている。実質的なオーストリアの主であったマリア・テレジアはプロイセン王であるフリードリヒを激しく憎んでいたことでも知られている。

「それにあのサンスーシーの老人もフランス風を尊んでいるようです」

「あの御仁の話は止めにしましょう」

実は彼女もプロイセン王が嫌いである。女性蔑視主義者であり女性をことごとく遠ざけているあの王は当時女性から徹底的に嫌われていたのだ。当時のロシアの女帝であるエリザベータにしろルイ十五世に代わって実質的にフランスを切り回していたポンパドゥール夫人もまた彼が嫌いであった。理由は簡単で利害が対立しているだけでなく彼が女嫌いだからだ。嫌わば嫌われるというわけである。

「不愉快なだけです」

「そうですね。私も政治の話をしにきたわけではないので」

男爵もそれに乗って話を止めるのであった。

「それではすな」

「はい。ええ、そこに」

家の者達が三つの小さなソファを持って来ていた。置く場所をそこでいいと告げたのである。

「ゆっくりとお話しましょう」

「わかりました。それでは」

テーブルも置かれた。朝あつた木製の白いテーブルと椅子は下げられている。オクタヴィアンは何気なくベッドをなおしている。それをメイドと見た男爵は興味深そうな目で彼女、いや彼を見ていた。

「可愛い娘ですな」

「新しく入った娘です」

「そうなのですか」

「ところですね」

男爵に左の席に座るように手で告げてからあらためて彼に問う。

自分は右側の席の前にいる。中央の席はわざとあけていた。

「どうしてこちらに」

「手紙のことで」

ちらちらとオクタヴィアンを見ながら答える。

「手紙のですか」

「一週間程前に着いていると思いますが」

外見に似合わず計算が上手かった。

「その内容にある通りです」

「左様ですか」

「はい」

答えながらもまたちらちらとオクタヴィアンを見ている。次第に好色さがそこに加わってくる。

「いいな。可愛いな」

「確か結婚されるんですね」

「そうです」

夫人に顔を向けて答える。だが目はやはりオクタヴィアンの方を

始終向いている。

「確か」

「ファニナル家の娘です」

「そうでしたわね」

話を聞いてそれに頷く。実は手紙の内容を憶えていないとは流石に言えない。

「ファニナル家といえば」

「貴女の御主人の推薦で貴族になった家で」

「そうでしたわね。それで」

実はあまりよく知らなくて話を合わせているのである。

「ネーデルラントにいる我がオーストリア軍に調度品を供給している家です。貴女は私とあの家の娘の婚姻にいささか御不満のようですが」

「それは別に」

「こう言っでは何ですが」

話す間に夫人はオクタヴィアンに目で部屋を出るように促す。オクタヴィアンもそれに頷く。オックスは話す間もずっとちらちらとそのオクタヴィアンを見ている。

第一幕その五

「私は男爵です」

「ええ」

言うまでもなく爵位では一番下である。

「それに田舎者ですし」

「そんなに卑下されなくとも」

「己の分際をわきまえているということですよ」

それもまた貴族である。厳然とした階級社会なのだ。

「ですから家柄は別に気にしてはいません」

「それはいいのですがそれだけではありませんので」

「彼女の年齢ですか」

「そうです。まだ」

夫人は言う。

「十五歳ではないですか」

「ええ。そして私は三十五歳」

かなり開いていると言わざるを得ない。

「しかも修道院から出たばかりではないですか」

「そうです」

「いささかまだ。無理があるのでは」

「ですが奥様」

ここで男爵はしっかりと夫人に顔を向けて述べてきた。

「お言葉ですがそれは多くの御婦人方も同じこと。そして貴女も」

「ええ。それはわかっています」

それは否定できない。多くの貴族の娘が彼女と同じ様な境遇で妻となっているのである。それは彼女もよく知っていた。公爵夫人として。

「しかもです」

夫人はさらに言う。

「このホーフに宮殿を持っておられて」

「はい」

ホーフとはウィーンの街のことである。

「ヴィーデンには家を十二軒も」

「その通りです」

ウィーン郊外のことである。

「しかも一人娘。いいお話だとは思いますが」

「だからなのです」

声に少し好色さと粗野さが見られた。同時に気品も混ざっているが。

「私もまた。あっ、ちょっと」

ここで男爵は不意にオクタヴィアンが化けたメイドに声をかけるのであった。狙っていたのは言うまでもない。

「チョコレートとココアを下げるのは」

「もう冷えていますので」

夫人が彼に言う。

「ですから」

「申し訳ありませんが」

男爵はその夫人に顔を戻して述べる。

「実は私はまだ朝を食べていないのですよ」

「でしたら後でパンでも」

「それもいいですがやはりここは」

「チョコレートがお好きで」

「大好きです」

本当に好きらしい。子供みたいに無邪気な笑顔を見せてきた。

「特に領地の家の者や農民達に与え共に食べるのが最高です」

「そうなのですか」

「緑にか困れそこで農夫の姿の彼等とですな」

どうも領地ではそれなりにいい領主であるらしい。

「そこで採れたワインもハムも共に食べるのです。これがよいので

す」

「それはそれで美味しそうですね」

「ウィーンもいいですがレルヒエナウもまたいいものです」

さりげなく自分の領地の宣伝もする。

「是非一度おいであれ。それでは」

そう言ったあとで半ば強引にチョコレートとココアを拝借する。

食べ方は少し荒っぽい。

それを腹に入れながらやはりオクタヴィアンを見る。そうして彼

女、いや彼に囁くのだった。

「ふむ、間近で見るとさらに可愛い」

「マリアンデル」

咄嗟に夫人がつけたオクタヴィアンが化けているメイドの名前だ。

「もう行って」

「いえ、奥様」

しかし男爵がそれを制止する。

「そう仰らずに。娘さん」

一応は優雅にオクタヴィアンに声をかける。

「私は今夜白馬亭にいてな」

「はあ」

オクタヴィアンの声が女のそれに非常に似ているのでここは助かった。

第一幕その六

「だから今日会わないかな」

「今日ですか」

「嫌ならいいのだが」

無理強いはいしない。最低限のエチケットはわきまえてはいた。

「だがそれはそれとして薔薇の騎士」

「それですね」

今度は夫人が頷く。何かとやり取りが忙しい。

「花嫁に銀の薔薇を贈る薔薇の騎士ですが」

これはウィーンの貴族達の風習である。まず花婿の銀の薔薇を花嫁に贈る。それを花嫁に手渡す、つまり仲介人になるのが薔薇の騎士なのである。それを選ぶことがまずは婚姻の第一歩なのである。

「その名誉ある役を担うのは誰にしましょうか」

「そう、それなのです」

またオクタヴィアンを見ながらも夫人に述べてきた。

「一体誰にするべきか。是非奥様に御意見を御聞きたくて」

「それが本当の御用件なのです」

「手紙に書いてあった筈ですが」

「そうでしたね」

また話を合わせる。読んでいないとは言えない。

「ですから」

「さて、誰にするべきか」

「ここは奥様にお任せ致します」

にこやかな笑みを作って述べてみせた。

「女性の方に従います」

「そうですか。それではそれで」

「はい。ではそういうことで」

「では今宵ですが」

「はい、今宵は」

やはりオクタヴィアンから目を離さないが話をするのだった。

「お話の為に夕食を御一緒したいのですが」

「今宵ですか」

「駄目ですか？」

「いえ、別に」

こうは答えながらも残念な顔になる。実はオクタヴィアンを誘うつもりだったのだ。

「それで明日にでも」

「いえ、明日も宜しいかも」

「どちらなのですか？」

「今考えているところです」

言葉をはぐらかすがこれはオクタヴィアンを守る為である。

「それでですね、男爵」

「はい、何か」

「契約書もありますし」

「結婚契約書ですね」

なおオーストリアはカトリックが主流である。神聖ローマ帝国皇帝家であるハプスブルク家が主なのでこれは当然であった。カトリックの擁護者というわけなのだ。形骸化はしていたが。

「それはこちらの書記にやらせておきます」

「ではそのように」

「さあマリアンデル」

今のうちにとすぐにオクタヴィアンに声をかける。

「貴女はもう」

「はい。それでは」

「いや、行くのか」

「何かおありで？」

「あるわけではないですが」

それは否定する。顔にもう出てしまっているが。

「まあ。可愛い娘ですな」

「ウィーンの生まれです」

こう答える。

「ほう、それはまた」

「さあ、だからマリアンデル」

また彼を行かせようとするがここでまた扉をノックする音が聞こえてきた。控え室の方からである。

「どうぞ」

入るように言うとは端整に黒い制服を着た初老の男が入って来た。公爵家の執事である。

「奥様」

「丁度いいところに来たわね」

彼の姿を見て笑顔になるのだった。

「書記はいるかしら」

「はい、控え室にもう」

「そう。ならいいわ」

それを聞いて笑みになるのだった。

「管理人もコックも。あと歌手に演奏に笛吹きも」

「用意がいいわね」

「都合がつけましたので」

「わかったわ。男爵」

見ればまたオクタヴィアンに言い寄っている。優しげな笑みを作って口説きにかかっている。

第一幕その七

「わしの領地の男達は皆逞しくて景色はよくてな」

「左様ですか」

「皆わしの誇りじゃよ」

本当に領民には親しみを感じているらしい。

「娘達は奇麗で母親達はしっかりしている。学生は勉強好きだし子供達は元気だ」

「いい人達ばかりなのですか」

「わしの宝物じゃ」

離す顔が本当に楽しそうである。

「それも見せてやりたいのじゃよ。ウィーンもいいがそこもまたいいぞ」

「あの、男爵」

また夫人は彼を窘めてきた。

「御領地のことはわかりましたので」

「おっと、左様ですか」

釘を差されたのですと引き下がる。そのうえで礼儀を整える。

「失礼しました」

「下がって」

「はい」

夫人はまずは執事を下がらせた。そうして彼が下がってからまた男爵に声をかけた。

「あまり御自身のことを仰るのはどうかと思いますが」

「すいません。ですが」

彼はまた言うのだった。

「ここはいい場所ですな」

「またどうしてですか？」

「こう言っては何ですが落ち着いた雰囲気です」

こう夫人に対して述べるのだった。

「スペイン風の物々しい振る舞いも不要ですし」

「主人は今のスペインは好きではないのです」

かつてはハプスブルク家のものだったがスペインのハプスブルク家が断絶し代わりにその因縁あるフランスのブルボン家が入ったのである。スペイン継承戦争の時のことだ。

「あえてそうしております」

「そうなのですか」

「はい。それでですね」

夫人はさらに言葉が続ける。

「あまりマリアンデルには近付かないで下さい」

「別に近付いてはいませんが」

「本当ですか？」

「私をお疑いになるのです？」

「別にそうではありません」

言葉の外に真意を隠してやり取りをする。

「ですが。彼女はまだ十七ですし」

「可愛い年頃ですな」

ここでそのマリアンデルことオクタヴィアンはそっと男爵の後ろに来る。

「むっ、まるで山猫の様に」

そのオクタヴィアンを横目で見てまた笑う。

「またいい感じに」

「何だか怖いわ」

「あら」

ここで夫人はオクタヴィアンもそのマリアンデルになりきっているのを見た。それを見て心の中では笑う。

「カンカンもやるわね」

「この方の側に寄るとどうなるか。奥様、怖いです」

「わしを怖れることはないんだよ」

男爵は男爵でこうそのマリアンデルに囁く。

「わしのところには綺麗な草原があつて枯草にも藁にも困らない」
別に家畜の餌としてだけ言っているのではない。

「鹿も雉も元氣だし木には果物があるし麦も一杯ある。何よりも皆
わしの誇りとするいい者達なのだよ」

「男爵、ですから御自身のことは」

夫人もオクタヴィアンに合わせて男爵に言う。

「ジュピターになつてしましますわよ」

「千の姿で千の娘に声をかける」

ジュピターは好色な神である。少なくともそれで有名である。

「それもまたよしですがな」

「ですが花には時として棘がある」

そつと薔薇を出してきた。

「御氣をつけあそばせ」

「中々きついお言葉で」

流石に今の言葉にはさしもの男爵も動きを止めた。

「では自慢はこの位にしておきます」

「はい。そういうことで」

「しかしですな」

言つた側からまた言う男爵であつた。中々めげない御仁ではある。

「奥様、このメイドですが」

「マリアンデルが何か」

「私の花嫁の側に置きたいのですが」

「どうしてまたそれを」

「見れば賢そうな娘です」

一応はそれを理由にした。しかし目が好色そうなそれになつてい
たのであまり説得力はない。

「ですから是非」

「あちらにももう側にいる娘達がありますが」

「それでもです」

だが彼はまだ言う。負けはしない。

第一幕その八

「一人知っている人間がいれば違います。私もまたそうですし」

「貴方もですか」

「ええ。息子をですね」

つまり私生児というわけである。夫人もオクタヴィアンもそれを聞いて驚かなかったことは私生児という存在は当時の貴族社会では普通だったからだ。とりわけブルボン王家の貴族社会では普通であった。そもそも結婚が縁組のビジネスに過ぎないから不義もまた当然の世界であったのだ。

「レルヒエナウの顔がよく出ていますが私の従僕長にしております。気が利く可愛い奴です」

「そうなのですか」

「いずれ騎士にしてやるつもりです」

さりげなく親馬鹿ぶりも見せる。

「機会があれば御会いして欲しいものですが」

「ええ、またの機会に。それではマリアンデル」

今度はオクタヴィアンを自分のところに招き寄せて保護した。そのうえで彼女、実は彼に言う。

「あのメダイオンを」

「！？テレーズ」

夫人の通称の一つである。

「一体何をするつもりなの？」

「任せて」

にこやかに笑ってオクタヴィアンに囁く。

「いいわね」

「わかったよ。それじゃあ」

彼女のその言葉に頷く。そうして彼女の芝居に合わせるのだった。マリアンデルに戻って。

「レルヒエナウ家は修道院も建立しましたし代々領民を守り愛したのです。それが我が家の誇りでして」

またそれを自慢しだす。

「ケルンテンやヴィンディッシュ＝マルクの世襲執事長でもありません。私もまた領民の為には本当に心を砕いているつもりです。少なくともフランスの貴族達のような真似はしませんぞ」

離している側からオクタヴィアンが小室に入ってそこからメダイオンを持って来ていた。夫人はそれを見ながらまた男爵に述べてきた。

「それで薔薇の騎士ですが」

「それは誰にされますか？」

「私の若い従弟でして」

「ええ」

「オクタヴィアン伯爵です」

つまり彼女はオクタヴィアンとはそういう関係なのだ。従姉と従弟の関係なのである。

「お名前は聞いたことはあります。これ以上はない高貴な存在ですな」

「それで宜しいでしょうか」

「はい。伯爵様には感謝致します」

こう答えてきた。満足したようである。

「このことには」

「そう。ではこれを」

「メダリオンですか」

「ここにある顔ですか」

そう言いながら男爵にそのメダリオンを見せるのであった。そこにあるのは。

「似ていますね」

「ええ、確かに」

そこにあるのはオクタヴィアンの顔であった。そう、オクタヴィ

アンのである。男爵はマリアンデルを見て交互にそのメダリヨンの顔も見て目を白黒させていた。

「いや、本当にそっくりで」

「この伯爵殿はロフラーノ家で」

「それはもう御聞きしましたが」

「侯爵閣下の二番目の弟殿なのです」

それがオクタヴィアンなのであった。つまりは三男なのだ。

「その方です」

「私にとっては願ってもない方」

爵位の関係と礼儀作法のうえからへりくだっての言葉であった。

「実はこの娘もその縁者ですし」

「おや、貴族の」

「彼の遠い親戚なのです。帝国騎士の娘でして」

「そうなのですか」

「ですから側に置いています」

こうも述べた。

「おわかりですね」

「お言葉ですが奥様」

釘を刺す夫人に対して反論する。

「私はこれでも貴族であるつもりなので女性に対しては紳士であるつもりです」

「本当ですか？」

「女性にかけるのは言葉だけ」

「ここはあくまで強調してきた。それが彼のもう一つの誇りであるようだ。」

「腕力にも策にも訴えるようなことは決してしませんので」

「その言葉信じさせてもらいます」

「是非共。レルヒエナウ家の名にかけて」

「ではレルヒエナウ男爵」

あえて彼をその名で呼んでみせてのあらたな言葉であった。

第一幕その九

「家の者をここに入れたいのですが」

「ええ、どうぞ」

その言葉を静かに受けた。

「それでは」

まずは洗面器やタオルを持った老婆が来た。男爵はまだオクタヴィアンが変装している次女に興味があったが夫人に氣を使つてかまたしてもフランス風の礼をしてからその場を後にした。夫人はそれを見てほつとしてオクタヴィアンを去らせる。夫人と老婆がカーテンの奥に隠れて身支度に入るうちに他の従者達が部屋を屏風などで飾る。それが終わり夫人も身なりを整え白い絹の質素でありながら華やかなドレスに身を包んで出て来た時にはもう髪も化粧も整っていた。その彼女の前に様々な者達が来ていた。

「奥様、犬はどうでしょうか」

「そうね。じゃあ一匹」

「わかりました」

動物屋の連れている大きな犬を飼う。執事が彼女の側に立つてその言葉に頷いていた。

「あとは鳥も。アフリカの珍しい鳥ですよ」

「どうでしょうかしら」

「奥様」

今度は三人の小さな子供達だ。貧しい身なりをしている。彼女達にもお金を幾らか私それからそこに来ていた帽子屋から羽帽子を買う。それが終わってから彼等が去るとまた男爵を呼んだ。またしても一礼した彼に対して一人の男を紹介した。整った身なりをした年輩の男である。

「貴方にこの書記を紹介しますわ」

「こちらの若い男ですね」

「ええ。彼に何か任せてね」

「わかりました。そういえば」

ここで夫人の後ろにいる男達のうちの一人を見た。

「どうかしたのですか？」

「いえ、そちらの」

「私でしょうか」

小さな丸眼鏡をかけ黒い帽子と長い服に分厚い服を持った男が応えてきた。一目見ただけで彼が学者であるとわかる。実際にそうである。

「いや、悪いが君ではない」

「そうなのですか」

「君だ」

その隣にいるひよろ長くて出っ歯の男を指差した。見れば細く抜け目なさそうな目をしていてにやけ顔だ。やけに調子がよさそうである。

「私ですか」

「そうだ。名前は何といのかな」

「ヴァルツアツキでございます」

彼は一礼してから男爵に述べた。礼は貴族風に恭しくはしている。

「新聞屋です」

「ヴァルツアツキさん」

夫人がその彼に不機嫌な声をかけた。

「もうあんな記事は書かないで下さい。事実かどうかかわからないものを」

「事実ですよ」

彼はこう夫人に反論してみせた。

「私は嘘才は申しません」

「ではアレオーレ子爵が死んだ話は何なのですか？」

「あれはただの噂話」

笑ってこう答えた。

「それだけです」

「その噂話がどれだけ多いのか」

こう言ってまた不機嫌な顔になる夫人であった。

「全く」

「まあまあ」

「ウィーンには面白い新聞があるのですな」

「もっといいものがありますよ」

そう言って男爵の注意を他に向けた。

「歌などはどうでしょうか」

「歌ですか」

男爵は歌と聞いてその目を少し動かした。

「ふむ。私も嫌いではありません」

「それではイタリアの歌なぞを」

「イタリアのですか」

「如何ですか？」

「はい、是非」

にこやかに笑って夫人に答えるのだった。その後ろでは今まで夫人の身支度をしていた老婆や衣装係、理髪師等が去っていた。後始末を終えていたのだ。

それを後ろに一人の若々しい顔立ちに黒い髪の子がでて来た。燕尾服を着たその彼がイタリア人であることはその顔からわかった。

男爵はその彼を見てまた夫人に言うのだった。

第一幕その十

「本場からわざわざ来たのですね」

「はい、ミラノから」

「ほう、それはまた」

ミラノと聞いてさらにその目を輝かせた。ミラノは当時オーストリア領でありこの時代にマリア・テレジアが歌劇場を造っている。これがあのスカラ座である。

そのミラノから来た歌手が一礼する。そうしてゆっくりと歌いだした。

「固く武装せる胸もて我は愛に逆らえり」

まずはこう歌いだす。

「されど二つの美しき目を見ると我は忽ちのうちに打ち負かされり」

愛の前に破れたのである。

「ああ、氷の心も炎の矢に遭わば何の抗いを為さん」

「愛は尊いもの」

「その通りです」

男爵は拍手をしながら夫人に述べる。それと共に夫人も応えその間に書記が彼のところに来た。すると彼はすぐにその書記に囁くのであった。

「それで話は」

「何でしょうか」

「支度金の贈りは私はした」

「ええ」

「こう言つては何だがあらからはあるのかな」

「さて、それは」

書記はそれには首を傾げる。

「どうなものでしょうか」

「持参金より前にあれだ。ガウナースドルフの城と領地だが」

「それは無理では？」

「そうかな」

「おっと、男爵」

書記にとって都合のいいことに笛吹きが序奏をまた鳴らす。歌手と共にいる者のうちの一人だ。他にはバイオリンもいる。中々凝っている。

「また歌が」

「むっ、そうか」

「では話はまた後で」

「いやいや、それでもだな」

「歌の時は歌を聴くものですぞ」

にこやかに笑って男爵をかわす書記であった。

「それではそういうことで」

「仕方ないな。それでは」

「なれど我が苦しみは貴く我が傷は甘し」

愛の苦しみと傷であった。

「されば苦痛は我が満足にして平癒はむしろ虐待だ。氷の心もまた」
「話は後にしてだ」

男爵は呟きながら考える。実際のところ歌はあまり聴いてはいない。
い。

「どうしたものかな、これから」

歌は終わった。すると夫人はすぐに執事を下がらせる。男爵はそれを見てまた呼び止めようとするが夫人がまた言うのだった。

「彼も忙しいのですで」

「そうですか」

「はい、また後で」

そう言って止める。

「それにしても」

そして顔を歌手達に向けた。笛吹きとバイオリン奏者にもまた。

「よい出来でした。有り難う」

「いえ。こちらこそ」

「それでは」

執事に顔を向けて金を渡させる。彼等はそれを受け取ってまた夫人に対して一礼するのであった。その間にあのヴァルツアツキともう一人何か小柄で色の黒い女が来た。

「さっきの」

「ヴァルツアツキです」

「アンニーナです」

女も名乗ってきた。

「男爵様、以後お見知りおきを」

「うむ。宜しくな」

「実はですね」

「よいお話が」

すぐに彼に対して囁いてきたのだった。

「よい話だと」

「悩んでおられませんか？」

「見たところ」

男爵が支度金の話を自分に都合よくまとめられないのでふてくされてゐるのを見抜いたのである。そうした目は実に抜け目がない。職業柄であろうか。

「まあそれは」

「事実ですね」

「それではですね」

「では聞きたい」

ここで彼は二人に対して問うた。

第一幕その十一

「何でしょうか」

「この家にいる娘だが」

「はい」

「マリアンデルという娘を知っているか」

「マリアンデル!？」

「この家にも出入りしているのだな」

「はい、そうです」

それは事実である。ヴァルツアツキが頷いてきてみせた。

「それが何か」

「では知っているな。奥様のメイドで」

「メイドで」

「いるな」

「おい、アンニーナ」

ヴァリツアツキは怪訝な顔でアンニーナに顔を向けて問うた。

「知ってるか」

「さあ」

相方の問いに首を傾げる。二人が知らないのも無理はない。しかしそう簡単にお金の匂いから離れる彼等ではない。こう言い繕ってきたのであった。

「知っていますよ」

「あの娘ですよね」

「そうか、知っているのか」

男爵もこれまたあっさりと二人に騙されてしまった。彼が一番知らないのだから無理もないことではあったが。

「知っているのなら頼むぞ」

「はい、それでは」

「是非」

こうして彼等の話は終わった。二人は去り男爵はここで扉をノックした音を聞いたので入るように言う。するとすぐに彼のところに数人の男が来た。その中の一人は見れば男爵そっくりの若者であった。男爵もその若者の顔を見てにこやかに笑う。

「よく来たな、ロイボルト」

「はい、父上」

彼もまたにこやかに言葉を返す。その息子というわけだ。

「あのケースを持って来ました」

「うむ御苦労。それではな」

「はい」

こうして男爵の手にそのケースが渡った。彼はそのケースを夫人に対して見せたうえで述べるのであった。

「ここに銀の薔薇があります」

「その薔薇がですね」

「そうです。それで」

またマリアンデルを探しだした。

「あの娘は」

「今忙しくて」

こう彼に対して告げた。

「ですが御心配には及びません」

「そうなのですか」

「オクタヴィアン伯爵には私からお話しておきますので」

このことに話を変えるのであった。

「それで宜しいですね」

「ええ、まあ」

男爵としてもそれには異存はない。だから穏やかに頷いた。

「私の為にもあの方は貴方の騎士としてその薔薇を花嫁さんの所へ持って行く仕事を果たすでしょう」

「では私は安心していいのですね」

「そうです」

こう告げて彼の関心をそちらにやる。

「ではこれでまた」

「そうですね。それではまた」

「御会いしましょう」

こうして話を終えた。男爵は我が子と従者達ににこやかな笑みを見せていから夫人に一礼した後でその場を後にした。他の者達も去っていく。一人になった夫人はようやく静かになったことにほっとしたのかまずは溜息をついた。最初に呟いたのは男爵のことであった。

「全く。どうしたものかしら」

今日の男爵のことを思つて呟く。

「いつもいつも何かと騒がしい人。子供の頃から」

実は二人は幼い頃からの知り合いなのである。

「あんな感じで。けれど私も」

翻つて自分のことも考える。

「変わらない。いえ」

すぐに考えを改める。

「変わったわ。娘からもう」

立ち上がりベッドのところにオクタヴィアンが置いたままにしてあつた手鏡を取った。それで己の顔を見て憂いに耽るのであつた。

「女になって。このまま」

寂しく哀しい気持ちに覆われた。

「お婆さんになって。老マルシャリンになって」
また呟く。

第一幕その十二

「どうして。歳を取ってしまうの。若さは永遠ではない。そしてその『どうして』の中に全部の相違があるのだから。本当に私はこのまま歳を取ってしまったって」

「どうされましたか？」

「カンカン」

そこにオクタヴィアンが戻って来た。服も男のものになっている。優雅な白と銀の貴族のものであった。

「とても悲しそうです」

「はしゃいだかと思えば悲しみに沈んだり」

そのオクタヴィアンからそっと顔を離して呟く。

「それが私だから。いつものことじゃない」

「いえ、僕にはわかっています」

だがオクタヴィアンはここで言ってきた。

「貴女は驚いて不安だから悲しいのですね」

「私が!？」

「そう、私のことが心配だったのですね」

彼はこう思っていた。

「だからですよ」

「少しはね」

こうは言うが彼がわかっていることは言わなかった。

「でも私は心をしっかりさせてそんなに心配することはないと思うことにしたの」

「そうなのですか」

「実際にそうよね」

他ならぬオクタヴィアンに顔を向けての言葉であった。

「従姉としてですか？」

「そうかも」

その言葉に頷く。

「私は」

「奥様」

「今は駄目」

歩み寄ろうとした彼に対して制止の声を出して止めた。

「あまり抱くのが多過ぎては駄目よ。何でも長くは手に入れてはいられないものよ」

「けれど貴女は僕のもの」

それでもオクタヴィアンは歩み寄ろうとする。

「だから」

「今はそう情熱的にならないで」

また言うのだった。

「大人しく。他の殿方みたいにはならないで」

「他の殿方？」

「主人やさっきの男爵みたいには」

そういうことであつた。

「だから」

「他の人がどうかは僕は知らない」

オクタヴィアンが知る筈もないことであつた。

「けれど僕はわかっています」

「何をなの？」

「貴女を愛していることが」

こう言つてまた歩み寄ろうとする。しかしそれも夫人の手で制止された。

「ビシェット、他の人達が貴女を他人にしたのですか？ 私の貴女は何処に」

「私はここにいるわ」

「それなら私は貴女を逃しはしない」

オクタヴィアンは何とか彼女を掴むように言う。

「僕は貴女を抱いて自分で誰のものなのかわかるようにする。僕は

貴女のものだし貴女は僕のものだから」

「頼むからわかって」

側まで来て抱き締めようとする彼から逃れての言葉だった。

「私の今の気持ちは違うのよ」

「違う」

「そうよ。時と共に流れていくものがどんなに弱いかな」

こう彼に語りだした。

「感じないではいられないのよ。このことが私の心に深く入り込んできているのよ」

「貴女の心の中に」

「そう。何かを留めておくことも掴んでもいられないの。全てが指の間から漏れて手を出して捕まえようとするものは消えて」

「そして」

「霞と夢の様に消えていくのよ」

「そんな悲しいことを仰らないで下さい」

オクタヴィアンもそんな夫人の声を聞いて悲しみに包まれる。無念そうに首を横に振る。

「貴女にとって私が大したものではないとでも」

「カンカン、わかって」

（この子もいずれは私の前から去るのに。この子を慰めなければならぬのね）

それが結ばれない恋の終幕である。わかつてはいたが。

「今何と」

だが今の言葉はオクタヴィアンの耳にも入っていた。夫人は不覚にも己の心を言葉に出してしまっていたのだ。

第一幕その十三

「いずれはなんて。誰が貴女の耳にそんな言葉を」

「それは」

「嘘ですよ」

「いい、カンカン」

夫人はあえて優しい声でそのオクタヴィアンに言うのだった。

「時は全てのものを変えはしないの」

「はい」

「けれど時は不思議なもの」

しかしこうも言うのだった。

「ただ夢中で生きている時は全く無に過ぎないの。けれど突然時の他何物も気に留めないようになるのよ」

「そうなのですか？」

「そうなのよ。時は私達の周りを囲み私達の中にもいるわ」

また言うのだった。

「顔の中に時はざわめいて鏡の中にもざわめいて」

「一体何が」

「あらゆるものの中にも流れているわ。私と貴方の間にも」

「僕と貴女の間にも」

「そうなのよ。音もなく砂時計のように」

ここで部屋の片隅にあった砂時計の砂が完全に落ちた。それで終わりであった。

「カンカン」

「はい」

「私は時々時が流れるのを聞くのよ」

「時をですか」

「そうなのよ」

悲しげに俯いて呟いた。

「絶え間ないその流れる音を。それで私は」

また夫人は呟いた。

「夜中に起き上がって時計を全部止めてしまうのよ」

「それ程までに」

「時のことを恐れる必要はないのかしら」

またこうも呟いた。

「時もまた神の創られたもの、ほかのあらゆるものと同じなのに」

「強いて悲しまれようとしているのですか？」

オクタヴィアンは時を恐れてはいない。だから言うのだった。

「私が側にいてその指が貴女の指と絡み合っているのに。私の目が貴女の眼差しを探しているその時に。貴女と私が共にいる時にどうしてそう思われるのですか」

「貴方は何時か私のところを去るわ」

夫人はまたオクタヴィアンに告げた。

「私よりもっと若くもっと美しい人の為に私の前から去るのよ」

「嘘だ」

オクタヴィアンはそれを信じない。

「そんな筈がない。何があっても」

「いえ、来るわ」

夫人はわかっていたのだ。だから言うのである。

「その日は必ず。黙っていても来るものなのよ」

「そんな日は絶対に来ません」

それでも彼はわからなかった。どうしても。

「そんな日が来るとしても考えたくはない。僕はそんな恐ろしい日は見たくもないし考えた雲ありません。どうしてそんなことを言うて僕と貴女自身を苦しめられるのです？」

「貴方を苦しめるつもりはないわ」

夫人はそれは否定した。

「私はただ貴方と私のことを言っているだけ。本当のことを」

「嘘だ、それは」

「本当なのよ。それに優しく堪えたいから」

声が優しいものになった。目も潤んでいた。

「軽い気持ちで軽い手で受け取って支えて逃がしてやる」
達観したような言葉になってきた。その中で。

「それができないと駄目なのよ。人というものは」

「まるで司祭様みたいだ」

オクタヴィアンは今の夫人の言葉をこう受け取った。

「何が言いたいのか。僕には全くわかりません」

「もう行って」

今度は突き放した。

「私は教会に行くから」

「教会に」

「そして伯父様のところに。グライフエンクラウの伯父様のところに」

「あの伯父様ですな」

「そうよ」

彼のことはオクタヴィアンも知っていた。

「もう身体が満足に動かなくなっているから私が顔を見せると喜んでくれるの。だから」

「そうですか」

「午後に使いをやるわ」

オクタヴィアンにも気遣いを見せる。

「プラーターへ行くかどうかね」

ウィーンの公園のことである。

「私の馬車の傍に馬を持って来て。けれどそれまでは」

「それではまた」

オクタヴィアンもフランス風のお辞儀をして夫人の前を後にする。

夫人はその彼を見送るが暫くしてあることを思い出してまたその顔に憂いを漂わせるのだった。

「最後に接吻を」

忘れてしまっていたのだ。それでベルを鳴らして従者達を呼ぶ。
しかし。

「もう行ってしまったわれました」

「もうなの」

「はい。門の前ですぐに馬にお乗りになりました」

彼等はこう答える。

「馬丁が待っておりましたので」

「まるで風のように速く馬にお乗りになり」

彼等はこう夫人に述べる。

「そのまま去られました」

「そう、わかったわ」

それを聞いて頷く。オクタヴィアンは朝に来たことになっていた
ので話はこれで済んだ。だがここでまた黒人の少年を呼んで彼に手
渡すのだった。

「これを。オクタヴィアン伯爵のところにね」

それは一通の手紙であった。

「わかったわね」

少年は無言で頷いてその場を後にする。夫人はそれを見届けてか
ら大きく溜息を吐き出しソファに座り込んだ。それでその場は憂
いの中に沈むのであった。

第二幕その一

第二幕 花嫁の前で

ここはファニナルの屋敷であつた。客間の中央の戸は玄関に通じ左にも戸がある。右手には大きなガラスの窓があり二つの角にはそれぞれ大きな暖炉が置かれている。白いオーストリア軍の軍服に似た制服の従者達も控えている。内装は穏やかで質素だがそれでいて細部に銀や絹を使った隠れた豪華を見せていた。

その中を白い髪を被って眼鏡をかけた痩せて小柄な男が歩き回っている。彼がこの屋敷の主でゾフィーの父親であるファニナルである。彼は周りの者の話を聞いていた。

「旦那様」

白い服のメイドが彼に声をかけてきた。この家のメイドのマリアンネだ。

「ヨゼフの駆る新しい馬車には空色のカーテンがついています」

「うむ、いいな」

空色は晴れの色だ。少なくともファニナルにとってはそうである。

「四匹の鼠色のまだら模様の馬に引かれています」

「それでいい。立派な馬なのだな」

「勿論です」

「旦那様」

今度は初老で黒いタキシードの執事が彼に声をかけてきた。

「何かな」

「もうお発ちになる時間ですが」

「もうなのか」

「そうです。貴族の花嫁の父は銀の薔薇の騎士が到着される前に発たれるもの」

彼はそう主に告げる。

「それがしきたりなのです」

「そうなのか」

「そうです。それで戸口の前で御会いになられれば」

「都合が悪いのだな」

「ですから。今のうちに」

そう彼に声をかける。

「宜しいですね」

「わかった。それではな」

「はい、今のうちに」

また主に述べる。

「では戻って来た時は婿殿がだな」

「そうです。旦那様、それが」

またマリアンネが彼に声をかけてきた。

「気高くも厳格なレルヒエナウの男爵様」

「そうだ」

彼等是这样聞いていたのだ。風聞どころではないでまかせの言葉だが。

「もうじき来られますよ」

「お父様」

ここで一人の小柄な少女がファニナルに声をかけてきた。まだ幼さの残るあどけないが肉付きも程よく瑞々しい美貌をたたえその白い髪を上でまとめている。だがそれはフランスの宮廷にあるような派手派手しいものではなく穏やかかものだ。青い目は湖の静かさと星の瞬きを同時に見せていた。唇はまるで薔薇の花の様に紅い。その少女が白と金の絹のドレスに身を包んでいる。彼女がゾフィーである。

「もうすぐなのですね」

「そうだよ、もうすぐなんだ」

優しい声で娘に語る。

「御前が妻となる時が来るのは」

「私は妻として」

「御前ならなれるよ」

その優しい声をまた娘に贈った。

「立派な妻にね」

「そうなります」

父の言葉にこくりと頷いてみせた。

「きっと。何があっても」

「そうあってくれ」

「ウィーン中が注目していますよ」

マリアンネはゾフィーの不安を消し去るように明るい声をかけてきた。

「神学校でもお坊様達がバルコニーから見えていますし」

「そんなになのね」

しかしそれがゾフィーをさらに緊張させた。顔が強張った。

「神聖な婚姻を前にして」

「来ました」

マリアンネがまた言った。家の入り口の方を見つつ。

「二台の馬車が。最初は四頭立てで次は六頭」

「いよいよね」

胸の前で手を組んで呟くゾフィーであった。

「薔薇の騎士が来られて。はじまるのね」

もうファニナルはいない。ゾフィーとマリアンネ達がいるだけだ。入り口の方から声が聞こえてきた。

「ロフラーノ伯爵のお着きです」

「ロフラーノ伯爵？」

「薔薇の騎士ですわ」

マリアンネがそうゾフィーに説明する。

第二幕その二

「他にもお嬢様の新しい親族となる方々も来られています」

「私の」

「そう、お嬢様の」

マリアンネの言葉は素直に祝福する言葉であった。

「今召使達が並んでいます。あちらの従者達も来て」

「そう、ついに」

「皆銀色の服を着て天使みたいです」

「ああ、天の神様」

天使と聞いて祈るゾフィーであった。

「どうか御加護を」

祈る間にオクタヴィアンの従者達が白に薄緑の制服を着て現われる。これはロフラーノ家の色である。他には曲がった剣を腰に持つハンガリーの騎兵や白い鹿皮の服に緑の駝鳥の羽を帽子に着けた走り使い達もいる。その中でオクタヴィアンがその銀の服を着ている。周りの従者達が彼の帽子や銀の薔薇を入れるモロッコ皮のケースを持っている控えている。薔薇は他ならぬ彼が持っていた。持ちながら前に進み遂には家の中に入って来た。そうして緊張した面持ちで厳かな声で前にいるゾフィーに対して声をかけるのであった。

「フロイライン」

「はい」

ゾフィーも頭を垂れて彼に応える。

「気高くも美しき花嫁にレルヒエナウという我が縁者の名に於いて」

「レルヒエナウの名に於いて」

ゾフィーもその言葉を繰り返す。

「愛の薔薇を捧げます。その名誉の役を僭越ながら私が務めます」

「貴方様の御好意」

ゾフィーは顔をあげてその薔薇を受け取った。それからこやか

に笑って述べた。

「かたじけのうございます。何時までも忘れません」

「はい」

「それにしてもこの薔薇は」

ここでゾフィーは薔薇から本当に香りがするのに気付いた。

「香りがするのですね」

「ペルシャの薔薇油を一滴入れてあります」

オクタヴィアンはこう答えた。

「それでなのです」

「そうでしたか。地上のものは思われぬ天界の聖なる薔薇の香りですね」

「おそらくは」

ゾフィーのその言葉に答えた。

「堪え忍ぶにはあまりにも強い香り。まずで心に鎖をかけて引いていくように惹き付ける」

「それ程までにですか」

「まるで幸福の様に」

薔薇の香りでもう恍惚としていた。

「何時ここまで幸福だったことがあったでしょうか」

「私입니다」

何故かここでオクタヴィアンは彼女に同意するのだった。

「けれど私は」

不意にゾフィーの顔が曇った。

「元の世界に帰らなくてはならない。遠い道を歩いて」

「遠い道を」

「そうです。けれど私は忘れません」

また恍惚とした顔を見せたのだった。

「この時を。永遠に。例え死んでも」

「私は子供だった」

オクタヴィアンは不意に呟くのだった。

「この人を知らなかった。この人を知らない私は何なのか」
自分に対して問う。

「どうしてこの人に出会ったのか。ここに來たのか。私が男でないのなら消え去りたい。けれど」

そのうえでまた呟く。

「この幸福の瞬間を一生忘れない」

「従兄様」

ゾフィーは顔を見上げてオクタヴィアンをこう呼んだ。これは貴族の呼び方だ。二人の周りでは従者達がそれぞれの動きをして世界を作り上げていた。その中で二人はじっと見詰め合っているのだった。

「私は貴方を前から存じていました」

「従妹様」

オクタヴィアンもそれに応えてゾフィーをこう読んで応えた。

「私を以前からですか」

「そうです、系図の木の描いてある本はオーストリアの名誉の鏡と申しますね…

「はい」

俗にこう言われてきていた。

「私はその本を夜寝床に入れて私の未来の親戚の方々を調べていたのです」

「そうだったのですか」

「貴方がお幾つかも存じています」

これはオクタヴィアンにとっては思いも寄らないことであった。

「十七歳と二ヶ月」

「そこまで」

「洗礼名もですよ」

「私自身もそこまでは詳しく知りませんでした」

これには正直に驚いていた。しかもそれを隠さない。

「貴女は。そこまで私を」

「その他のことも存じています」

ここでゾフィーは顔を赤くさせていた。

「カンカンという仇名も」

「それですか」

「親しいお友達を貴方のことをそう御呼びになるのですね」

「はい」

その通りであった。驚きを隠せないまま答えた。

第二幕その三

「美しい御婦人方もそう呼ばれるとか」

「それは」

「今私は非常に嬉しいのです」

オクタヴィアンを見上げての言葉であった。目は彼を見ている。

「一人でいる時とは違う別の世界に入るのですから」

「だからなのですわ」

「そうです。貴方も喜んで下さりますわね」

「勿論です」

（何という美しさか）

ここで心の中で呟いた。

「従兄様」

また彼をこう呼んできた。

「私が私となる為にはまず男の人が必要なのです」

「男がですか」

「まずはそれが貴方」

またオクタヴィアンを見上げての言葉であった。

「ですから私は男の方にまず感謝の念を持ちますわ」

「それはつまり」

「そう、貴方に対して」

この上なく優しい笑みでの言葉であった。

「私は貴方の名誉を何があってもお守りしますわ」

「何と有り難いお言葉。では私もまた」

オクタヴィアンもゾフィーのその気持ちを受けその心に近付いていた。

「そうさせて頂きます。貴女と同じように」

「私と同じように」

「そうです」

そして言うのだった。

「貴女が不当な扱いを受けることを許しません」

「私がなのですね」

「ええ。何故なら貴女は」

そしてまた言ってみせた。

「この世で最も素晴らしい、美しい方なのですから」

「それはお世辞では」

「笑って下さるのならそれで結構です」

返す言葉は毅然としたものであった。

「貴女のされることは何でもそのまま受けますから。おや」

「また馬車が来ましたわ」

マリアンネが二人に告げる。

「おそらくあれは」

「フロイライン」

オクタヴィアンはゾフィーに顔を向けて告げてきた。

「花婿が来られました」

「私の夫となる方が」

「そうです。ここに来られたのです」

それを教えるのであった。

「さあ。もうすぐです」

ここでファニナルが戻って来た。儀礼通りである。しかし儀礼通りはそこまでここからはそれが碎けてしまったものになった。何故なら。

「こら、御前達」

「あの声は」

「レルヒエナウ男爵のものです」

急に聞こえてきた場違いの声に戸惑いを見せるゾフィーにオクタヴィアンが説明する。彼はその顔を少し顰めさせていた。

「では私の旦那様となる方が」

「そうです。ですが」

（様子がおかしいな）

オクタヴィアンは心の中で呟くのであった。

（ここは騒ぐ場所ではないのに）

ウィーンの儀礼を知っている彼はこう思った。しかし声はまた聞こえてきた。

「そうウロウロ歩くな。行儀よくだぞ」

「すみません、旦那様」

穏やかに窘める男爵の声とそれに謝る声が聞こえてきた。

「慣れていないもので」

「わかればいい。では行くぞ」

「はい」

こう話をしていた。そして扉を開けて出て来たのは着飾った男爵と彼の従者達であったがその従者達がどうにも野暮ったいのだ。まるで田舎からそのまま出て来たようであった。

「うわあ、こりゃいいお屋敷だ」

「旦那様のお屋敷よりも」

「何でわしのところだ」

口を尖らせて今の言葉には問い返す。

「いやあ、全然違うなあと」

「立派なものです」

「ウィーンだから当然だ」

男爵はこう彼等に言う。

第二幕その四

「しかし落ち着け。折角連れて来てやったのだぞ」

「わかりました、旦那様」

「それでは」

彼等も頭を掻きながら応えて彼の後ろに下がる。彼等を控えた男爵はゾフィーの前に進み出てまずは一礼しその手に接吻をした。ところがそつとその手を撫でるのを忘れない。

「奇麗な御手ですな」

「はあ」

「噂にたがわぬ」

「男爵」

娘の横に来ていたファニナルがここで彼に声をかけてきた。丁度いいタイミングで男爵も立ち上がっていた。ファニナルはここでマリアンヌを紹介する。

「こちらがゾフィーの侍女のマリアンヌです」

「左様ですか」

「今度の返事は素っ気無い。」

「可愛いよな」

「そうだよな」

彼の後ろの従者達は別にしてだ。オクタヴィアンも紹介され一礼するがまたここで男爵の従者達が言うのだった。しかもよく聞いてみればかなり訛りの強い言葉であった。

「いやあ、男前の方だ」

「まるで女の子みたいだよ」

「あの、男爵様」

マリアンネがその彼等を見ながら男爵に声をかけてきた。

「お連れの方々が」

「失礼。こらっ」

それを受けて彼等を怒り出した。しかし声は優しい。

「静かにしておれと言っているではないか」

「すいません旦那様」

「別嬪さんに男前の殿方もおられるんで」

まるで畑で話しているようだ。素朴だが残念なことにここでのマナーではない。

「だがそれでもだ。静かにしておれ」

「すいません」

「それではあつし等はこれで」

「困った奴等だ。しかしですな」

オクタヴィアン達に顔を戻して言う。

「これで立派な奴等なのですぞ。気は優しくて力持ち」

「はあ」

ゾフィーはかなり戸惑いを見せていた。

「至って気のいいレルヒエナウの、わしの宝なのですじゃ」

「いや、旦那様」

「お宝だなんてそんな」

従者達もまんざらではないようである。その証拠に顔が笑っている。

「その中でもこれは。ロイポルド」

また我が子と呼んだ。

「息子でしてな。利発で気が利いて」

「ここの自分の子供は出しませんよね」

「まあ普通はな」

マリアンネと執事はヒソヒソと話をする。

「デリカシーに欠けるというか」

「何と言うべきか」

二人は困った顔をしていた。

「それで男爵」

ファニナルはそと進み出てきた。後ろにはワインのボトルを持つ

た従者が一人控えている。

「私からささやかな贈りものです」

「ワインですか」

「そう、トカイです」

オーストリアで最も高級とされるワインだ。皇室御用達のものである。

「是非贈らせて頂きたいのですが」

「トカイといえますと」

しかし男爵は目を丸くさせているだけだった。どうやら知らないようである。

「どんなワインでしょうか」

「トカイを御存知ないのですか？」

「さて」

今度は首を捻った。

「ワインには詳しいつもりですが」

「やっぱりワインはレルヒエナウだよな」

「そうそう」

「だから静かにしておれ」

また従者達を叱る。しかしやはり声は優しい。

「ですが頂きます。ワインなら何でも好きでして」

「はい。それでは」

「後で皆で飲むとするか」

「流石旦那様」

「太っ腹」

「あの、男爵」

あまりにも場違いな雰囲気を見せる男爵を見かねてオクタヴィアンが出て来た。

第二幕その五

「何でしょうか」

「せめて従者は静かにさせて欲しいのですが」

「ですから嗜めているではないですか」

「ですが」

「それよりもすな」

スケベそうな目でゾフィーを見て話を変えてきた。

「フロイライン」

「はい」

ゾフィーもそれに応える。だが少し引いている。

「まずはお話を。これからのことですが」

「何でしょうか」

「あの、男爵」

またオクタヴィアンが言う。

「今はそれよりもですね」

「まあまあ」

だが男爵は彼に取り合わずゾフィーばかりを見ている。そして彼女に語り掛けるのだ。

「これからの二人は。幸せになり」

「けれどまだはじめて会ったばかりで」

「それでも私にはわかります」

ゾフィーの話は全く聞いてはいないのだった。

「まずは従者達の無礼失礼を」

「はあ」

それは一応は謝罪する。ゾフィーもそれを受ける。

「ですが悪気はないので。パリとは違い」

パリの作法の五月蠅さを皮肉り否定していた。

「オーストリアですので。お許しを」

「ですか」

「まあ私達も少しは破目を外しましょう」

「いい加減どうにかならないものか」

オクタヴィアンはそんな男爵を見て齒噛みしていた。

「幾ら何でも」

「さてさて」

ファニナルがまたどう言っているかわかりかねている顔であった。

「男爵様も困るが従者の者達も。どうしたものか」

「おい見ろよこのワイン」

「それに窓ガラスも」

相変わらぬ様子で彼等であった。

「美味そうだよな」

「レルヘンフェルトにも行こうぜ、後でな」

「そうするか」

「少しはしゃぎ過ぎではないかな」

彼等を見て呟くファニナルであった。

「困ったことだ」

口では呟くがどうにもできない。その横ではこれまだ男爵が好色な目でゾフィーを見て話し掛けている。

「若鶏の様な。そんな感じか」

「私が鶏ですか」

「いやいや、レルヒエナウではですな」

また自分の領地のことを口にする。

「婚礼の時には領主、つまりわしとその夫婦に鶏を馳走することになっ

ていますな」

「それをお願い出したのです。ですから私もまた鶏を後で」

「別に鶏は」

「いやいや、遠慮はなりませんぞ」

やはり話を聞いてはいない。

「鶏を食べて幸せを祈り」

「幸せは」

「一夜でわかるものです。こちらの歌にもありまして」
「どちらの？」

「当然レルヒエナウのです。気持ちよい歌でして」

「しかしこれまた」

マリアンネがそっとオクタヴィアンに歩み寄って囁く。

「お嬢様がお困りなのですが」

「わかつている。けれど」

今は我慢しているのだった。彼なりに。

「どうしたものか」

「私と一緒にならいつも長くはないでしょう」

遂には歌いだした。しかもそれに従者達も続く。

「私は貴方のものになりますわ」

「私と一緒に暮らすなら」

「どんなお部屋も小さ過ぎないでしょう」

「私がいなければ毎日悲しいことでしょう」

こう歌いだしたのだった。いい加減オクタヴィアンも腹が据えかねていた。

第二幕その六

「もう限界だ。何とかならないものか」

「いやいや、わしは幸福者ですじゃ」

「いよつ、旦那様」

またしても従者達が調子に乗って主を乗せる。

「この幸福者」

「憎いですぞ」

「ははは、帰ったら皆でワインとビールで乾杯だ」

「旦那様の幸せに」

「ついでにソーセージとハムも」

「よいぞよいぞ」

こんな調子であった。ゾフィーのことは好色そうな目で見るだけで完全にレルヒエナウにいる時と同じになっている。少なくともウィーンのそれではないのは確かだ。

「さて。それでな」

「はい」

「どうされますか？」

また従者達と話をする。部屋中にいる従者を自分の側に集めようとする。それでオクタヴィアンの前を通ってそのところにいる従者達を手招きしようとする。その時だった。

「そうじゃ」

浮かれきった顔でオクタヴィアンに顔を向けて話すのだった。

「伯爵殿」

「何でしょうか」

不機嫌を隠さずに男爵に伝える。

「どうも花嫁はまだ何も御存知ない。しかしですな」

「何でしょうか」

不機嫌なままで応える。

「それもこれまでのこと」

「どういふことですか？」

「だから申し上げたまままでございます」

得意満面な顔であった。

「初々しいからこそ可愛い。そしてその可愛さが」

「どうなるのでしょうか」

「全てわしのものになりますのじゃ。もっとも伯爵殿が」

「私が？」

「彼女に少しいろ目を使われても何も言いませんぞ。わしは寛容ですのぞ」

そう言うのと彼の前を通り過ぎた。そうしえ自分の従者達を手招きする。オクタヴィアンは嫌悪に満ちた顔で彼を見ながらゾフィーのところに歩み寄る。それから彼女に囁いて問うのであった。

「本当にあの男と？」

「いいえ」

必死にそれを否定する顔で首を横に振って応える。

「そんなことは。それですね」

「何でしょうか」

「御願いしたいことがあるのです」

小声で囁いてきた。

「御願いですか」

「そうです。助けて下さい」

小声だが必死に嘆願してきたのだった。

「どうか私を」

「わかりました」

それに頷く。ところがここで家中で騒ぎが起こった。

「どうしたのだ？」

「あの、旦那様」

ファニナルが騒ぎに顔を顰めたところで今この部屋にいる執事とは別の執事が慌てた様子で部屋に入って来た。若い黒い髪の執事だ。

「大変なことになっています」

「大変なこと？」

「レルヒェナウ家の方々がですね」

「わしの家のか」

男爵はそれを聞いて顔を向けた。

「どうしたのだ？」

「大酒を飲むわ大飯を喰らうわ女の子にからむわで」

「そんなに凄いのか」

「まるでフランスの兵隊共です」

またフランスが出た。これでもこの時代同盟関係にある。

「トルコ人の方がずっとましです。お酒を飲まず羊しか食べずムスリムの女の子以外には声をかけたりはしないので」

「そうなのか」

「はい。もう無茶苦茶です」

こう主に訴えるのだった。

「どうしたものか」

「ふむ、それでしたら私が」

男爵が名乗りを挙げた。

「何とかしましょう」

「御願います」

「それで女の子達は大丈夫なのかい？」

ファニナルはそちらを心配していた。

「気になる。案内してくれ」

「はい、こちらです」

「行くぞ」

「わかりました」

男爵と従者たちも向かう。マリアンネと年輩の執事も。こうして二人になったのだった。

第二幕その七

二人になるとゾフィーはまずほっとしたように大きく息を吐き出した。そうして言うのだった。

「御願います」

またオクタヴィアンに訴えかけてきた。

「どうかこの私を」

「はい、それではですね」

「何が」

「まずは貴女御自身をお助けすることです」

こうゾフィーに告げるのだった。

「私をですか」

「そうです」

彼は言う。

「それですね。まずは」

「どうすればいいのでしょうか」

「まずはです」

オクタヴィアンは真剣な顔でゾフィーを見詰めていた。そうして囁くのであった。

「私達二人の為に私達を護るのです」

「私達を」

「そうです」

そう答えて頷く。

「貴女の為に、そして私の為に貴女は御自分を御護り下さい。そして今の貴女を見失わないようにして下さい。宜しいですね」

「わかりました」

目に涙を湛えてオクタヴィアンの言葉に頷く。それから彼を強く抱き締めた。

「憂いに心を支配され絶望にかられ。その貴女の信頼する友人とし

て今ここにいます。何という幸福なことでしょうか」

「貴女がいればもうそれだけで憂いも絶望も消えます」
ゾフィーもまたそれに応えて言う。

「何が起ころうと押し黙り木の枝の鳥の様に身を隠して止まって貴方がここにいることを感じたい」

「私をです」

「そうです」

また彼の言葉に応えた。

「貴方が喜んでここに来られたか危急で来られたか。ですが」
彼は想うのであった。

「何時か美しい夢の中でそれが起こったような」

「そう想われますのね」

「はい。感じませんか、それを」

「感じます」

そしてゾフィーはそれに頷いた。

「そのことを。不安に襲われなければならない筈なのにそれがなくて。苦しみも消えて」

「どうなっているのですか？」

「言葉で言い表せと仰られても言えない。けれど貴方が今ここにおられるだけで」

「宜しいのですか？」

「はい」

うつとりとした顔と声で頷いてみせた。オクタヴィアンを抱いたまま。

「貴方の御顔が。若々しく明るい目が私に注がれて優しい表情が癒してくれる。けれどそれすらも判らなかった」

「そうだったのですか」

「けれど今は側にいて下さい。それが私の願いです」

そこまで言ってまだ抱き締め合う。そこで急にある二人が部屋に飛び込んできた。元帥夫人のところで男爵に声をかけていたあのイ

タリア人、ヴァルツアツキとアンニーナであった。

「男爵様、男爵様！」

「大変ですよ！」

「くっ、しまった！」

オクタヴィアンは素早くゾフィーから離れて呻いた。

「大変なことになるぞ」

「どうしよう」

「貴女が心配されることはありません」

再び不安に包まれたゾフィーに顔を向けて安心させるように告げた。

「………わかりました」

オクタヴィアンのその言葉を信じることにした。その間も二人はけたたましく騒ぎ遂には男爵が左の戸口から出て来た。そうしてシニカルな笑みを作ってオクタヴィアンに問うのであった。

「幾ら何でもこれはまずいと思いますが」

「貴方は私のことを判ってはいないからです」

ゾフィーがオクタヴィアンの後ろから叫んだ。

「ですから」

「私は伯爵殿にお伺いしているのでな。伯爵殿」

あえて鷹揚にオクタヴィアンに声をかける。

「どういったことでしょうか」

「今回の件で大きな変化が起こったのです」

オクタヴィアンは男爵を見せてこう述べるのだった。

「大きな変化ですと」

「そうです」

その声も目も毅然としたものである。

「この方は」

「どうされたのでしょうか」

「この方は」

「どうされたのでしょうか」

一旦言葉が繰り返された。

「申し上げましょう。貴方が御気に召されないのです」

「御心配なく」

それを聞いても男爵は全く気にすることがない。平気な顔であった。

「そのうち変わりますので。だからフロイライン」

優しい声になってゾフィーに声をかけた。

「中へ。婚姻の署名を」

「嫌です」

だが今度はゾフィーが断ってきた。自分から。

第二幕その八

「私は一緒には行きません」

「そういうことです」

オクタヴィアンも彼女を護りながら男爵に対して告げる。今にも腰の剣を抜かんばかりの剣幕で。

「貴女とは結婚されないのです」

「戯言ですな」

ましてや貴族の世界では、男爵は言葉の外でこう言っていた。そのままさらに言葉を続ける。

「そんなことを本気で取り上げては世の中は動かない。ですから」
「行かないと言っているではありませんか」

前に出た男爵の前に立ちはだかるようにしてまた告げるオクタヴィアンであった。

「さあ、下がって下さい」

「人を待たせるのはいかがでしょうか、伯爵殿」

「そんなことは話していませんでしょう」

オクタヴィアンも退く気はなかった。あくまで突っぱねる。

「とにかく。彼女は貴方とは結婚する気はないのです」

「ふむ、十七とは思えぬ気迫ですな」

これは完全に皮肉である。

「ですが伯爵殿、あまり無体なことを言われてはいけませんぞ」

「無体なことですよ」

「そうです。あまり我儘を言われると」

ここで呼んでもいないのに男爵が入って来た戸口から彼の従者達がどやどやと入って来た。皆真っ赤な顔をしている。その手にワインの瓶や大きなソーセージを持っている者までいる。彼等は男爵の後ろから口々に言うのだった。

「どうしました、旦那様」

「まさか大変なことが」

彼等の主に異変が起こっていることを察知してそれぞれ身構える。
だが男爵達はそんな彼等を制する。

「御前達は静かにしておれ」

「はあ」

「そうでしたか」

「男爵」

オクタヴィアンはここで遂に剣に手をかけた。

「彼女は何があらうとも」

「旦那様！」

「ここは剣を」

「馬鹿を申せ」

しかし男爵は剣を抜こうとはしない。それどころか後ろから急かす従者達を叱った。

「他所様のお屋敷の中でだな」

「ですが旦那様」

「向こうは」

「さあ、男爵」

既にオクタヴィアンはその剣に手をかけ引こうとはしない。

「剣を抜きなさい。そして」

「果し合いというわけですな」

「そうです。さあ」

「では」

ここに至って遂に彼も剣に手をかける。といってもオクタヴィアンのそれとは違い動きがどうにも野暮ったく鈍いものであった。

「勝負を」

「宜しいでしょう。それでは」

二人は剣を抜いて突き合う。勝負は呆気無く終わり男爵が剣を落とした。

「しまった、やられた！」

「旦那様、御無事で！」

「大丈夫ですか！」

従者達は酔いも一気に醒めて男爵に駆け寄る。男爵はその彼等にも叫ぶ。

「医者を呼べ！」

まずはこう叫ぶ。

「包帯もだ！警察も！血が流れているな！」

「本当だ！」

「早く手当てを！」

オクタヴィアンをよ所に必死に男爵を気遣う。しかしそこにあのヴァルツァッキとアンニーナが来た。そして彼等に囁くのだった。

「あらあら、これはまた」

「薔薇の騎士にやられるなんて！」

「何てことだ！」

しかし従者達はそれを聞かず騒ぐだけである。男爵もまた。

「早く、早く手当てを！」

「言いたいことがあるなら何でも言うのだ」

オクタヴィアンはまだ剣を手に使っていた。その剣を見せながら堂々と言い放つ。

「ここで起こったことは私が弁護できる」

「何という混乱」

ゾフィーはゾフィーで今起こったことにオロオロしていた。

「けれど。この方の剣の速いこと。それに何と頼もしい」

「血は駄目なのだ！」

男爵はその前で叫んでいるがゾフィーの目には入っていない。

第二幕その九

「誰の血であっても。血が流れるのは見たくもない！」

「その通りです」

「ですから旦那様」

つまりは彼等の血も見たくはないというわけなのだ。

「ここは落ち着かれて」

「怪我はわし等が」

「またこれは随分」

マリアンネはそっとゾフィーの側に来て彼女を守りながら言う。

「大変なことになりましたけれど」

その騒ぎの中に戻って来たのは。騒ぎを聞いたファニナルであった。彼も今日は彼自身が思っていたよりもずっと忙しい日を送る破目になっていた。それを言葉にも出しながらたまりかねた顔で言うのだった。

「今度は何なのか。決闘なのか!？」

「その通りです」

「旦那、ここはどうか」

男爵の従者達がここでファニナルに言うのだった。

「お医者様を読んで下さい」

「どうか」

「わかりました。しかし」

彼は少し憔悴した様子でここで呟くのだった。

「こんな騒ぎになるとは。伯爵殿」

「はい」

オクタヴィアンは剣を収めてから彼に一礼した。

「こんなことを期待してはいないのですが」

「申し訳ありません」

オクタヴィアンもこれには素直に謝罪する。

「私としても悲しむべきこと。ですが」
「ですが？」

「このことに関する真実は娘さんから御聞きになるでしょう」

「ゾフィーから」

「そうです」

ゾフィーに顔を向けた彼に答える。

「その通りです」

「お父様」

そしてゾフィーもここで父に顔を向けて言うのであった。

「あの方のお振る舞いは間違っています」

「一体何を言っているんだ」

ファニナルは娘の言葉に顔を顰めさせる。そうして二人と男爵達の丁度真ん中に座って話をするのであった。マリアンネと彼に従う執事達がその後ろについた。

「この方は御前の夫になるんだよ」

「嫌です」

またきっぱりと言い切ってきた。

「この方は」

「馬鹿なことを言う」

その後ろから医者が来た。そうして男爵の手当てにかかった。手当てといっても腕を少し切っただけなので実に簡単なものであった。「薔薇の騎士が剣を抜くわ花婿は傷を受けるわこの騒ぎだわ。確かにわしは成り上がり者だ」

その自覚はあった。

「しかし。だからといって名誉がないわけではない。その名誉にかけて言おう」

「何をですか？」

「男爵様と結婚するのだ」

そう娘に命じた。

「わかったな。例えこの方がなくなろうとも」

「ふむ」

その右手で医者が男爵を見ながら声をあげていた。

「大丈夫です」

「そうか、よかった」

「旦那様は御無事か」

従者達がそれで喜んでいる。ゾフィーはそれも水にやはりオクタヴィアンに守られつつ父に言葉を返すのだった。それまでにない強い声で。

「例えこの人が死のうが生きようが」

「どうだというのだ？」

「結婚はしません」

それをまたはつきりと言うのだった。

「何があるうとも」

「では無理にでもだ」

売り言葉に買い言葉だった。ファニナルも引かない。

「結婚させる。いいな」

「それなら私が死にます」

「なら私は教会で神父様にいいえと言います」

今度はこう返す。

「なら修道院に戻してやる！」

「ですからお父様」

いい加減泣きそうな顔になって父に叫ぶのだった。

「私はどうしても」

「ならん！」

腕を組んで娘の言葉をつっぱねる。

「何があるうともな」

「フロイライン」

困り果てるゾフィーにオクタヴィアンが囁く。やはり彼女の前に立って護っている。今は怒り狂う父の嵐から護る様にだ。

第二幕その十

「御安心下さい。後から便りを寄越します」

「伯爵様……………」

「伯爵殿」

ファニナルは口をへの字にさせてオクタヴィアンにも言う。

「あまり娘に近付かないで下さい。宜しいですね」

「すみません」

「とにかくだ」

また娘を睨んで言う。

「今は部屋に下がれ。頭を冷やせ」

「……………はい」

父のその言葉に俯いて頷く。そしてオクタヴィアンに一礼しマリアンネに護られるように付き添われながらその場を後にした。それでまずは一人退場であった。

しかしオクタヴィアンも男爵も残っている。ファニナルは今度は男爵に顔を向けた。

「大丈夫ですか」

「何とか」

あの元気は何処にいったのか声が弱々しい。

「そうですか。ではお飲み物は」

「いや、それは結構」

いつもなら頼むのだが今はそれを頼む元気もないのだった。

「そっとしておいてくれ」

「宜しいですか、男爵」

ここで彼は男爵に対して穏やかな調子を何とか作りながら話すのだった。

「貴女の御親切と御寛容に対して接吻致します」

「わしに対して」

「そうです。娘だけでなく」

恭しく語る。

「この屋敷の全ては貴方のものです」

「わしのものだ」と

それを聞いただけでもう機嫌をなおしだした男爵であつた。

「真ですか、それは」

「私とて貴族です」

その誇りはあるのだ。

「嘘は申し上げません。娘にも我儘は言わせません」

「左様ですか。いやいや、それでは」

かなり機嫌を直し従者達に囲まれた中で言うのだった。

「まあお話は後で」

「ささ、トカイを」

「これはどうも」

執事がファニナルに手渡しそのワインを受け取って一杯飲む。ところが持つ手が痛んでそれでまた顔を顰めるのだった。

「痛っ……、全く以って」

斬られたことを思い出して歯噛みする。悔しさと憎らしさで苦い顔にもなる。

「こんな目に遭うとはな。訴えるべきか」

「是非そうしましょう」

「旦那様がやられっぱなしでは」

従者達もそれを聞いて彼に言う。

「レルヒエナウの名誉が廃りますぜ」

「ですから」

「まあ待て」

しかし信頼する彼等の言葉を聞くといつもの鷹揚な男爵になった。その鷹揚な様子で言うのである。

「落ち着くのだ。いいな」

「はあ」

「それでしたら」

主の言葉を受けて彼等もまずは落ち着いた。男爵はそれを見届けてからまた言う。

「まあ伯爵殿も去られた。そしてだ」

「そして？」

「若い娘の我儘はいつものこと」
いつもの余裕も見せだしていた。

「これはこれで面白い話ではないか」

「左様ですか」

「その方かも知ってしよう」
得意げな顔で従者達に問う。

「気の強い方が女は可愛いものじゃ」

「確かに」

「言われてみればその通りで」

またその訛りの強い言葉で口々に言い出していた。

「そういうことですな」

「その通り。では」

「はい、どうぞ」

「ささ、もう一杯」

今度は従者達がワインを注ぐ。彼等が入れたワインを一気に飲み干す。それからまた言うのだった。

第二幕その十一

「やはり御主等が入れてその側で飲むのが一番だわい」

「ではまた後で」

「旦那様とご一緒に」

「よいぞよいぞ」

もういつもの男爵であった。そんな彼のところにアンニーナがまた来ていた。

「んっ！？ どうしたのじゃ？」

「旦那様」

含み笑いを浮かべて彼のところにそっと寄って囁く。

「実はですね」

「何かあったのか？」

「何かあるから来るのです」

「それもそうか。して何用じゃ？」

「これです」

そつと一通の手紙を差し出すのであった。

「これをどうぞ」

「手紙か」

「そうです。さあ」

「うむ。それではな」

手紙を受け取ってそれを開く。するとそこにはマリアンデルからと書かれていた。

「おっ」

男爵はその名を見てまずは楽しそうに声をあげた。

「これはいい。あの娘からか」

「あの娘！？」

「あっ、何でもないぞ」

にやけた顔であるが従者達に言葉を返す。

「何でもないからな」

「わかりました、それでは」

「それでだ」

そしてあらためて手紙を読むことを再開させるのだった。そこに書いてあることは。

騎士様

私は明日の晩時間があります。貴方様をお慕い申しておりますが奥方様の前ですから中々言えないでいました。ですがどうか明日の晩に御会いして下さい。

貴方をお慕いするマリアンデルより

「おお」

男爵は最後まで読んでその顔をさらににやけさせた。

「これはいい。明日か」

「明日!？」

「明日に何が」

「その方等には関係のないことだ」

にやけた顔のままに従者達に返す。

「気にするな。よいな」

「むっ、これはまさか」

「女の子と？」

「だから。関係ないと言っておるだろう」

そうは言っても顔は笑ったままである。

「よいな。それで」

「はい、それでは」

「そういうことで」

彼等はそれで黙ることにした。だが男爵はここでさらにアンニナに対して言うのだった。

「まずはこれを」

「毎度あり」

さりげなく金貨を数枚掴ませた。一応はチップということだ。

「それでじゃ。場所は」

「どうされますか？」

「わしのホテルにしよう。いや」

「いや？」

「居酒屋がいいか」

こう考えを変えた。

「そこにする。店の名前は」

「はい、場所は」

アンニーナに囁いて場所を決める。男爵はもうそのことで頭が一杯になっていた。他のことはもう頭に入ってはいなかった。見事なまでにであった。

第三幕その一

第三幕 結ばれる二人

居酒屋エレクトラ。名前はともかくとしてあまりいい酒屋ではない。ウィーンの下町にある騒がしい酒屋だ。ここで男爵が店の客達と既にある加減に出来上がっていた。

木造で質素だが広い店だ。檜の木のテーブルの上には雑然とハムやソーセージやワインにビールが置かれている。男爵は店の中央の円卓に大きく陣取りそこに店の常連や自分の従者達を従えて陽気に飲んでいたのであった。

「バツカス万歳！」

「バツカス万歳！」

皆男爵の言葉に合わせて杯を掲げる。木製の大きいが軽い杯だ。そこにはワインやビールがほんの少しばかり残っている。ほんの数滴だけであるが。

賑やかな場所であり奥には二階に続く階段がある。その後ろの階段をちらりと見つつも男爵は陽気に彼等と飲み続けていた。

「旦那様」

そこにアンニーナが来た。ヴァルツァッキも一緒だ。二人はそれぞれ礼装をしている。アンニーナは黒いドレスでヴァルツァッキは黒いタキシードである。同時になりこそはいいが何か得体の知れない怪しい感じの老婆もやって来て店の二階へと入るのであった。

そこに少女が来た。マリアンデルである。アンニーナは彼女を見て楽しげな笑みを向けた。

「あら、来たのね」

しかしマリアンデルはまずは一礼してからそつと彼女に歩み寄りポケットの中に手を入れて金貨がたつぷりと入った袋を手渡した。ヴァルツァッキにもだった。そのうえで彼等に囁く。

「そうなのですか」

「わかりました。それでは」

二人は彼女の囁きに真剣な顔で頷く。これまでの明るい顔が消えていた。そうして今度は五人のこれまた怪しい男達がやって来てマリアンデル及び二人と話した後で店のそれぞれの場所に入った。だが男爵はそれに気付くことはなく従者や客達と飲み続けている。その彼のところに太ったエプロンの男が来た。この店の親父である。

「男爵様」

「おお、親父か」

男爵は酒に酔った朗らかな顔で彼に顔を向けた。むしゃむしゃとハムを食べながら。

「美味しいな、ここの酒も料理も」

「有り難うございます」

「いやいや、これはいい」

そう言いながら黒ビールを一気に飲み干した。

「幾らでもいける。しかも安いときたものだ」

「貴族の方がこの店に来られるのは珍しいのですが」

「こいつ等に教えてもらったのじゃよ」

満面の笑みで自分の従者達を指差すのだった。

「美味しい酒と料理の店があるとな。それでここにしたのじゃ」

「左様ですか」

「左様じゃ。そしてじゃ」

横目で親父を見つつ問うてきた。

「二階はどうなっておるか」

「既に用意はできております」

「うむ、御苦労」

それを聞いてまずは満足気に笑ってみせた。

「何よりだ。それではな」

「ではそろそろ上がるぞ」

そう言って一人立ち上がった。

「ああ、御主等はそのままでいい」

まだ盛んに飲み食いしている自分の従者や客達にはこう告げた。

「これでな。つりはいらんぞ」

「おお、これは中々」

「太っ腹な御仁だ」

客達は男爵が袋ごと金を置いていったのを見て思わず声をあげた。

「気前のいい男爵様だ」

「俺達にまでおごってくれるなんて」

「困った時は何時でもレルヒエナウに来るがいい」

男爵は朗らかに彼等に言葉を返す。

「助けてやるし御馳走もしてやるぞ」

「それでこそ我等の領主様」

「いよっ、この色男」

「本当のことを言うな」

少なくとも半分は本気で言葉を返す。それから親父に向き直ってそっと囁くのであった。

「あの娘が来たら二階にこっそりとな」

「畏まりました」

「燈火の用意は？」

「もうできております」

こう男爵に答えた。

「葡萄酒やおつまみもまた」

「よいぞよいぞ、上出来だ」

それを聞いて満足した顔で親父のエプロンのポケットにそっとコインを入れた。

「少ないがな」

「すいません」

親父は笑顔でそのコインを受けていた。

「給仕はいらないのでしたね」

「ああ、わしがやるさ」

これを聞くのは野暮なことだったがそれでも機嫌よく言葉を受け

返した。

「休んでおれ。いいな」

「はい、それでは」

「ではな。娘が来たらな」

「わかりました」

こうして男爵は二階に消える。二階は少し薄暗く燈火に照らされ一つのテーブルと二つの椅子があった。そこは一つの部屋だが二階にしてはかなり広い。しかも隣に怪しい部屋がある。男爵はその中で一人楽しげにワルツのステップを踏んでいた。そこにそのマリアンデルがやって来たのだった。

第三幕その二

「男爵様」

「おお、遂に來たか」

そのマリアンデルの顔を見て満面の笑顔になる。酒でもう真つ赤だがそれが余計にいい。

「では。まずは」

二つある木製の杯の両方にワインを注ぐ。そのうちの一つをマリアンデルに手渡そうとするが彼女は俯いてその申し出を断るのであった。

「私はお酒は」

「駄目なのか」

「すいません」

「それならいい。酒は楽しく飲むものだ」

これは男爵の哲学だ。

「無理強いはせぬさ。ところで」

「はい」

「まあ楽しく話でもしよう」

陽気に笑いながら彼女に言う。さりげなくにじり寄ってもいる。

「ではな」

「お隣の部屋は」

「気にすることはない」

何があるのかさえも言いはしない。

「何ということはないさ。休む場所だ」

「そうなのですか」

「そしてここは騒ぐ場所」

言いながらテーブルの上のお菓子を手に取って食べる。チョコレートクッキーである。特別にここに取り寄せたものだ。親父に金を弾んで。

「さあ。では楽しく話をしよう」

「ですが男爵様」

しかしマリアンデルは畏まったまま男爵に対して尋ねるのであった。

「貴方様は確か花婿様では」

「おや、そうだったかな」

その質問にはあえてとぼけてみせる。目が上を向いて知らないふりだ。

「さて、どうだったかな」

「そうなのですか」

「ここではそんな世間のことは関係ないのだよ」

またマリアンデルににじり寄る。しかし彼女はコケティッシュな動作で彼をかわす。

「おや、これは可愛い動きだ」

「そうでしょうか」

「おなごにしては。しかも」

ここでマリアンデルの顔をあまり明るくはない部屋の灯りの中で見る。見ればその顔は。

「似ているな」

「誰にでしょうか」

「まあ当然か。血縁だったか」

この前の朝の元帥夫人との話を思い出す。うろおぼえだがそれが心に引っ掛かる。そのせいでマリアンデルにこれ以上近付くことができなくなっていた。それで困っていると。

「むっ!？」

部屋の隅のカーテンが動いたのが見えた。窓は全部閉まっている。それも確かめて首を捻るのであった。

「妙だな」

「どうなさいました?」

「うむ、今カーテンがな」

そのことをマリアンデルにも言うのであった。

「動いたのだが」

「気のせいでは？」

「そうかのう。それに」

またマリアンデルの顔を見る。見れば見る程似ているように思えるのだった。

「本当に気のせいかのう」

「さっきから何を」

「いや、何でもない」

ここではこれ以上言わなかった。ふと下から音楽が聴こえてきた。
「むっ」

「いい曲ですね」

「確かに」

ここではマリアンデルと男爵の考えが一致した。表向きは。男爵は心からであるが。

「しかしだ」

「はい？」

「どうしたのだ、急に」

マリアンデルの異変に気付いたのだ。その異変とは。

「しんみりとしたな」

「あまりにもいい曲ですから」

「そうだな、確かに」

男爵もその言葉には頷くことができた。彼のお気に入りの曲であるからだ、

「この曲はな」

「何か？」

「聴いていると落ち着いてくるだけではない。心が優しくもなる」

「優しくですか」

「センチメンタルにもなる」

意外にも目を閉じての言葉にもなっていた。しんみりとした感じ

に彼もなっていたのだ。

第三幕その三

「どうにもこうにも」

「心ではどんなことを望んでいても」

マリアンデルは不意に言ってきた。

「結局は全ては同じです」

「またどうして急にそんなことを」

「何でもかんでも。皆下らないものでしかないわ」

「そうともばかり限らないさ」

男爵は優しい言葉を彼女、実は彼にかけた。下心も復活させながら。顔の笑みにそれが浮かんでいる。

「いいかね」

「いえ」

しかもマリアンデルは男爵からさっと逃れてまた言葉を続ける。

「時は過ぎ去り風は吹き去る」

乙女の顔の哀しい言葉であった。

「私達だっていずれは。人は皆いずれは」

「また悲しいことを。歌のせいか」

「いいえ」

とは言ってもマリアンデルとしての哀しい言葉は続く。

「どんなに力があってもどうにもできないのです。貴方のことも私のことも」

「ワインを飲み過ぎたのかな？」

男爵は彼女、実は彼の様子を見てこう考えた。

「そういえばわしも。飲み過ぎたか」

「飲み過ぎですか」

「うむ」

マリアンデルのその問いに頷く。

「少し済まんな」

「あつ、はい」

彼はここで鬘を取った。何と彼のその頭は鬘であったのだ。というよりはこの時代の貴族は皆鬘を着けている。驚くべきというかその本当の髪型が毛髪のないものだったからだ。見事なまでにそれがなかったのだ。どうもそれをかなり気にしているようであるがここでまた言った。

「暑い」

そう言いながらハンカチでその頭を拭く。

「しかし本当に」

「何か？」

またマリアンデルの顔を見るがここでもオクタヴィアンにそっくりに見えるのだった。

「いや、何でもないが」

「左様ですか」

「しかしな」

ワインを飲みながら部屋の中を見回す。どうも気配を感じているのだ。

「おかしなものだ」

「そうでしょうか」

「何かが感じられるのだ」

「何を！？」

「むっ！？」

声が聞こえてきた。それは。

「あの人だ」

女の声であった。

「あの人私の夫です」

「あの人！？」

男爵はそれを聞いて顔を顰めさせた。同時に青くもさせている。

「誰がだ」

「まさか幽霊が！？」

「いや、違う」

マリアンデルのその言葉を恐怖と共に否定する。

「これは。違う。有り得ない」

「ですが今のは」

「あそこです」

何とアンニーナが変装して出て来た。店の給仕達に止められているがそれでも部屋にやって来たのであった。ずかずかとした調子で。

「あの人が私の夫です」

「!? 誰だ」

（いよいよか）

男爵は慌ててアンニーナが変装した女に顔を向けるがマリアンデル、実はオクタヴィアンはここでにんまりと笑う。そうした差が見事なまでに出ていた。しかし男爵は気付いていない。

「あの人を訴えます」

「わしをか!?!」

「神が私の証人で貴方達が私の証人です。女帝陛下の御前で裁判を」

「何なのだ、今度は」

「さあさあ男爵様」

アンニーナは戸惑う男爵にさらに言う。

「早くお認めになって下さい」

「誰だ御前は。しかも」

彼女だけではない。他にも大勢いた。

「男達も来た。しかも」

「御可哀想に」

店の親父が来て泣いていた。

第三幕その四

「お気の毒な奥様」

「奥様も何も」

男爵は啞然としながら言葉を発する。

「わしはまだ結婚も」

「パパ！」

今度は四人の小さな子供達まで出て来ていた。そうして男爵にま
とわりついてきている。

「パパ！パパ！」

「わしは御主等のパパではないぞ！」

「嘘を申し上げなさるな」

「そうです」

周りから男達が言う。

「ですからお認めになって下さい」

「わしは子供は一人だ」

男爵は慌てて釈明する。

「女好きだが。ちゃんと認知は」

「嘘です」

しかしそれはアンニーナが否定する。

「その証拠に私は」

「わしはそなたなぞ知らん！」

ムキになって否定する。

「それで何をだ！」

「さて」

喧騒の中でマリアンデルはオクタヴィアンに戻っていた。その顔
でヴァルツアッキに問い掛ける。実は彼とアンニーナがオクタヴィ
アンが買収して取り込んでいるのだ。

「ファニナルさんの方は」

「万事怠りなく」

「ならよし」

それを聞いて微笑む。その間にも喧騒は続いている。

「パパ！パパ！」

「さあ男爵、お認めになって下さいまし」

「早く！」

「だから知らん！」

男爵は必死になって否定する。

「わしはこんな女は！」

「ああ、酷い！」

アンニーナは今度は嘘泣きに入った。

「何という惨いお方！」

「重婚は重罪ですぞ！」

「神に反します！」

「風紀警察に通報を！」

「今度は風紀警察か！」

いい加減男爵も嫌になってきていた。

「何故どうもこうも。わしは潔白だ！」

「潔白なら御証明を！」

「さあ！」

「わしはカトリックだ！」

怒って宣言した。

「プロテスタントも領内では認めておる。しかしあくまでカトリックだ！」

「ではやはり」

「そうですね。重婚のかどで」

「だから何故そうなるのだ」

うんざりした顔になっている。

「警官を呼んでくれ。早く」

「はいはい」

ヴァルツアツキ達は頷きはする。しかし。

「ではすぐに風紀警察を」

「こちらに」

「だから違う！普通の警察を！」

「パパ！パパ！」

「警察ですが」

何故かとんでもないタイミングでここで警官達が部屋に入ってきた。警部が二人の巡査を連れて出て来ている。何とも絶妙な、怪しいまでのタイミングだ。

「呼ばれましたが」

「何が起きているのでしょうか」

「重婚です！」

「違う！」

アンニーナと男爵双方から叫び声があがる。

「私は騙されたんです！」

「こんな女は知らん！」

「何が何だか」

「ああ」

オクタヴィアンがにこにことした顔で警部の方に来た。それからそっと囁く。

第三幕その五

「私ですが」

「むっ、貴方は」

「まあ話を聞いて下さい。静かにさせて」

「わかりました。それでは」

オクタヴィアンの言葉に頷いて。すぐに笛を吹いて皆を沈静化させた。この辺りは流石であった。

「さて、それではですな」

「はい」

皆警部に顔を向けて話を静かに再開させた。

「この主は」

「私です」

店の主人が答えた。

「そうですか。それでこの騒ぎは」

「この男爵様が」

「ふむ」

主人の言葉を受けて男爵に顔を向ける。

「こちらの大きな方がですね」

「そうです、その方がですね」

見れば男爵は必死に鬘を探している。しかしどういうわけか見つからない。

「レルヒエナウ男爵様といいまして」

「知らないのですが」

「何っ!？」

自分の名前が出て慌ててそちらに顔をやる。

「わしを知らないと」

「少なくとも証明はできませんが」

「下に従者達がいるぞ」

男爵はそう言われてすぐにこう答えた。

「それはな」

「おや、ですが」

「何じゃ」

すぐに警部の様子がおかしいのを察して問い返す。

「何か不都合でもあるのか？」

「下にいる客は皆酔い潰れておりますが」

「ううむ」

男爵はそれを聞いて難しい顔になった。それと共に腕を組んで考え込むふうになった。

「何とも。困ったことじゃ」

「他に証明できる方法はおありでしょうか」

「この者じゃ」

次に出してきたのは丁度いいタイミングで隣にいたヴァルツアツキであった。無論これはヴァルツアツキの方からも狙ったのである。

「この者ならわしが誰かを証明できるぞ」

「いえ、私は」

しかしここでそのヴァルツアツキがとぼけるのであった。オクタヴィアンはそれを見て内心よし、となる。しかし顔はマリアンデルのままなのだった。

「それはできません」

「何だと!？」

「果たしてこの方が男爵様かどうか。わたしにはわかりかねます」

「何と。貴様どういうつもりだ!？」

「まあまあ落ち着かれて」

また警部が男爵を宥める。わかつてはいるから落ち着いたものである。

「ところでこちらの若い娘は」

「ああ、この娘か」

まだ彼はマリアンデルと思っている。だから娘なのだ。

「何でもない。わしが面倒を見ておつてな」

「貴方がですか」

「何かあるか？」

「あります。貴方の身元がわからないというのに」

「どうしてそれで保護なのだと。そう言いたいのである。」

「どうして保護などをできましようか」

「ではこの娘の名前を言おう」

「らちが明かないと見てこう言い切り出してきた男爵であった。」

「よいか、この娘の名はファニナルという」

「おいおい、またこの人は」

「言っちゃったわね」

ヴァルツアツキとアンニーナは男爵のとてもない嘘に思わず呆れてしまった。これはオクタヴィアンも彼の周りにいる者達も同じだった。声には出さなかっただけである。

「ソフィアアンナバルバラ」

「むむっ」

警部はその名を聞いてわざと身構えてみた。これもまた演技だ。

「フォンファニナル閣下の御令嬢だぞ」

「その方が何故メイドの格好を？」

「ま、まあそれはそれで」

警部に突っ込まれてしどろもどろになる。だがそれでも言い繕うとする。

「色々と事情があつてな」

「事情ですか」

「左様。そういうことだからな」

この場を強引に終わらせようすると。そこにそのファニナルがやって来たのだった。これも全てオクタヴィアンの策略であるのだが。

第三幕その六

「何故こんな時間にこんなところに」

所謂体面を気にするパターンの上流階級にある者特有の猥雑なものを嫌う風潮をそのまま出しながらこの場にやって来たのはそのフアニナルであった。彼は男爵の姿を認めるとその面持ちをさらに出して彼に対して問うのであった。

「何故貴方がこんな所に？」

「どうしてここに」

「どうしてここにと言われましても」

フアニナルの方で困った顔になって彼に問い返すのだった。

「貴方が私を呼んだのではありませんか」

「わしが!？」

「そうです。それでどうしてその様なことを」

「何が何だか」

「あのですな」

タイミングを見事に見計らって警部がまた話に入ってみせてきた。

「この方は一体」

「あっ、まあこの方は」

立場がさらに苦しくなった男爵は何とかこの場を取り繕おうとまた嘘をつくことにした。

「唯の知り合いです」

「どちら様でしょうか」

「フアニナルです」

男爵が答える前に本人が答えてしまった。男爵はあっと思わずその口を大きく広げてしまった。

「フォンIIフアニナルです」

「むむっ、それではですな」

警部はそれを聞いて彼なりに事情を察して述べた。芝居のうえで。

「こちらの方のお父上ですな」

「こちらの？」

そう言われても訳がわからずまた怪訝な顔になるファニナルであった。

「何のことでしょうか」

「いやいや、何でもありませんぞ」

男爵はまだ必死にこの場を取り繕おうと努力するのだった。

「御氣になされずに。さあ帰りましょう」

「実はこちらの方がですな」

しかしそれを逃がす警部ではなくまた男爵を指差してファニナルに対して言うのであった。それを見た男爵はまた非常にバツの悪い顔になる。彼にとってはまさに惨劇だ。

「こちらの娘さんが貴方の娘さんだと」

「えっ、私のですか」

「そうです」

ここでまた。アンニーナが子供達にチョコレートをやってから男爵にけしかける。

「パパ！パパ！」

「うわっ、まだいたのか！」

「パパ！？」

それを聞いてまたファニナルが顔を向けた。

「パパとは！？」

「ですから何でもありません」

男爵はもう泣きそうな顔になって言い繕う。

「わしにはもう何が何だか」

「この人の妻です」

絶好のタイミングでアンニーナが大芝居を打つ。

「そしてこの子達は私達の」

「何っ！？正式に結婚しておったのか！？」

「違う！」

男爵は思わず絶叫する。

「わしはまだ。それに子供は一人だけしかないし」

「一人だけとなると」

「この子供達ではない！」

「いえいえ、まだまだ一杯いますぞ！」

「よっ、もてますな！」

「もててもおらん！」

必死に周りの囃しに言い返す。

「どうしてだ。何が何だか」

「むっ、ここで」

オクタヴィアンが一人声をあげる。ゾフィーがやって来たのだ。

「お父様」

「どうして御前がここに」

「お父様が呼んだのではないのですか？」

娘は思わぬ本当の娘の登場に目を丸くさせる父に対して言葉を返した。

「それで私も参上したのですが」

「！？呼んでいないが。だが丁度いい時に来た」
顔を顰めさせて娘に告げる。

「いいタイミングですか」

「そうだ。見よ」

「パパ！パパ！」

「知らないと言っている！」

「ですが証明することはできませんね」

「その子供達は何よりの証拠ですよ」

子供達と実は役者達に囲まれて右往左往している男爵を忌々しげな目で見ながら語るのであった。

第三幕その七

「さあお認めになって下さい」

「御自身のされたことではないですか」

「旦那様！」

「どうされましたか!？」

ここでようやくといった感じで彼の従者達が来た。彼等はすぐ子供達やアンニーナ達を押しつけて主を取り囲んで守る。男爵は彼等を守られだしてようやく落ち着いた。それでやっと話すのであった。

「こういうことですじゃ。わしはオックス男爵ですぞ」

「酔っ払いに証明できるとでも？」

「だからどうしてこう」

わざと納得しない警部に対してまた泣きそうな顔になるのだった。

「信じてくれんのだ」

「あの」

またマリアンデルとしてオクタヴィアンが警部のところに来た。

「むっ!？」

「ああ、そうだ」

男爵は彼女、男爵がそう思っている相手を見て活路を見出した気になってまた述べるのだった。

「わしは彼女に何もしておらんよ。誓って言う」

「私にも結婚を誓われましたわね」

「だから貴様なぞ知らんわ！」

横から言ってきたアンニーナに対して叫ぶ。

「何故そうなるのだ、一体全体」

「やはり信用できませんね」

「そうだな」

警部はわざとらしく警官の言葉に頷く。

「任意同行を願うか」

「なっ、貴族であるわしが」

「ですから」

「あっ！」

だがここで。また新たな声が聞こえてきた。店の主人の声だった。が思いも寄らぬ客、この日のこの店で何人目かわからないその客の来訪に声をあげたのである。

「どうして貴女様がこちらに」

「貴女様！？」

「それは一体誰だ！？」

皆とりあえず男爵から目を離して声の方を見る。男爵もとりあえず目が離れたのに感謝して声の方に顔を向けるのであった。するとそこにいたのは。

「どうして……」

オクタヴィアンは思わず声をあげてしまった。何とそこにいるのは元帥夫人だったのだ。白いシックな外出着に身を包み羽根飾りのついた帽子を被っている。穏やかかつ優雅な物腰で部屋に入ってきたのであった。

「ようこそここに」

男爵が最初に彼女に頭を垂れる。オクタヴィアンは慌てて着替えの為にカーテンの奥に消える。夫人は静かに警部のところに来て告げるのであった。

「お久し振りですわね」

「はい」

「んっ！？」

男爵は警部が夫人に丁寧な頭を垂れたのを見てふと不思議に思った。

「奥様はあの警部とお知り合いなのか」

「主人の伝令をされていた時にはどうも」

「はい」

二人はそうやり取りを続ける。そうした間柄だったのだ。

「どうしてあの方がここに」

オクタヴィアンはカーテンの中で必死に服を脱ぎながら呟く。彼は既に自分の服をメイド服の下に着込んでいたのである。それで今こうして着替えているのだ。

「何がどうして」

「あの」

ゾフィーがここで怒りを抑えた様子で呆然としている男爵に声をかけてきた。

「むっ!？」

「私の父からの言伝えですが」

「言伝え!？」

「そうです。それは」

「奥様」

今度姿を現わしたのは。オクタヴィアンであった。男爵は彼の姿を認めてまた顎が外れる程驚いた。しかしそれは彼とその従者達だけの驚きであった。

「何故ここに」

「何が何なのか」

「今申し上げます」

そんな男爵達をよそに夫人の前に来た。それから優雅に片膝を着いて述べるのであった。

「このお嬢様は」

「伯爵」

夫人はあえて彼を。今伯爵と呼んだ。しかしオクタヴィアンは今それには気付かず当然ながらその意味にも気付かない。若さ故に。

「はい？」

「いい方ね」

微笑んでゾフィーを見ての言葉であった。

「あの方は」

「は、はい」

無意識のうちに夫人の言葉に頷く。片膝をついたまま。

第三幕その八

「まことに」

「素晴らしい方だわ。そう」

ここでまた何かを言おうとしたが。ゾフィーが男爵に怒った言葉を続けていたのでそれは中断せざるを得なかった。

「貴方はもう」

「何なのだ？」

ゾフィーは扉を背にして立ち。小柄な身体に怒りを込めて話す。その剣幕に男爵は退いていた。既にこの時点でもう負けてしまっていた。

「わしが何と」

「我が家の屋敷、いえ関係するどの場所にも近付かないで下さい。若し近付けば」

「どうなると」

「何が起こつても責任は持てません。以上です」

これはほぼゾフィーの言葉であったが。この場では絶対のものとなるものであった。有無を言わせない程強いもののある言葉であった。

「おわかりになられましたね。それでは」

「ううむ」

「男爵」

夫人は今度は。男爵に対して囁くのだった。そっと彼の側まであえて寄って。

「もうお止めになつては如何？」

「お止めになつてはとは」

「彼女はもう」

あえてここで言葉を止めた。男爵を氣遣って。

「おわかりですわね」

「それは」

「そういうことです。ですから」

「そうですね」

遂に夫人の言葉に頷いた。彼ももう何をしても駄目だということがわかったからだ。彼とても決して愚かではないからわかることである。だからこそ頷いたのである。

「ここは」

「そうです。では」

夫人は今度は。警部に声をかけた。

「警部さん」

「はい」

警部もそれに応える。二人のやり取りに移った。

「今夜のことはただの馬鹿なこと」

「左様ですか」

「そうです。ですからそういうことで」

「わかりました。全ては馬鹿げた冗談ですね」

「ええ」

結論はこういうことになった。夫人はあえて誰も表立っては恥をかかないようにしたのである。これが彼女の配慮であった。

「男爵」

夫人は話を収めたところでまた男爵に声をかけた。

「何でしょうか」

「おわかりですね。あの娘は」

「全く何が何だか」

オクタヴィアンであることはわかったが。それでも頭が混乱して何が何なのかわからなくなった。オクタヴィアンのことも今ようやくわかったからだ。驚かなかったのはその前にゾフィーに縁切りを告げられてそのショックの中にいるからだ。だからである。

「似ていると思えば」

「仮面舞踏会です」

「仮面舞踏会！？しかしそれは」

マリアⅡテレジアは風紀に非常に厳しい。仮面舞踏会はいかがわしい逢引にも利用されていたので彼女はそれを徹底的に取り締まっていたのである。男爵はそれも知っているのだ。

「ウィーンの仮面舞踏会です」

「ウィーンの！？」

「そうです」

こう男爵に対して答えた。穏やかなままで。

「それだけです」

「何が何なのかわかりませんが」

「それでも男爵」

静かに。また男爵を氣遣ったの言葉を述べるのであった。

「騎士で。貴族であられるならば」

「貴族であるならば」

「そうです。ですから」

「わしは。そうだ」

確かに彼は貴族だ。その誇りもある。今それをあらためて思うのであった。これこそが夫人の導いたものであった。

「貴族であった」

「ですから今はお考えになられずに」

「そうですね。それは」

ちらりとオクタヴィアンにゾフィーを見る。何故かもうオクタヴィアンへの恨みは消えていた。自分でもそれが不思議ではあったが。「わかりました」

「有り難うございます。そうして頂けると」

「レルヒエナウ家の者は他人の楽しみを妨げる程野暮ではありません。では」

「ええ。それでは」

「所詮わしはレルヒエナウの者」

言葉と表情に自嘲が見えた。だがそれはほんの一瞬のことですぐ

に打ち消したのであった。夫人だけがそれを認めたがあえて言い
しなかった。

第三幕その九

「ウィーンには用はなかったのだな」

「さて」

夫人は彼の言葉を聞きながら。今度はヴァルツアツキやアンニナ、それに役者や子供達に対して顔を向けるのだった。騒動の脇役達に対して。

「貴方達も。お帰りなさい」

そう言いながら懷からそつと何かを出す。それは数個の宝石であった。

「これを」

「えっ、これは」

「こんなに」

「今夜の。仮面舞踏会の出演のものです」

こう述べてその宝石達を手渡すのであった。

「ですから」

「これはお店のお勘定も入っているのですね」

「勿論」

店の主人に対しても答える。

「ですから。もうこれで静かに」

「わかりました。それでは」

「もうこれで」

彼等は去った。そしてそれを受けて男爵も。夫人に対してまずは一礼したのであった。最初と同じフランス風のあのお辞儀であった。

「奥様。それでは」

「ええ、これで」

「ウィーンとはお別れです」

「もう来られないのですか？」

「今回のことでよくわかりました」

これが男爵の出した結論であつた。

「そういうことです」

「左様ですか」

「所詮わしは田舎者」

また自嘲の言葉が出た。

「そういうことです。それでは今度は」

「レルヒエナウで、ですね」

「ええ、お待ちしておりますぞ」

「わかりました。それでは」

「ささ、旦那様」

ここで。従者達が素早く彼を取り囲む。こんな時でも主のことを氣遣っている。酔つてはいてもだ。

「鬘を」

「コートを」

「おお、済まんな」

彼等からそういったものを受け取って目を細める。

「探していたのだから」

「今見つけました」

「ですからすぐに」

「うむ、済まんな」

彼等に礼を告げて身に着けて。それから後にするのだった。

とりあえず胸に想うことは見せない。貴族としての体面は保ちつつ従者達を従えて酒場を、ウィーンを後にするのであった。何も残さずに。

男爵がいなくなると。後に残ったのは。

「私は一体」

オクタヴィアンは戸惑つてその場をうろうろとしていた。どうしていいかわからなかったのだ。

「何が何だか。こんな筈では」

「こんなことがあるなんて」

そしてそれはゾフィーも同じだった。二人の若者達は夫人の周りで
おろおろとしていた。ただ静かにそこに立っている夫人の周りで。
「あの人はあの方のお側にいて。私はあの人にとってはからっぽに
過ぎない」

「私があの娘さんをお助けして。それがどうして」

「伯爵」

ここで夫人は。またオクタヴィアンをあえて伯爵と呼んだのであ
った。

「はい？」

「早くお行きなさい」

「行くとは」

「そうです」

表情はにこやかな笑みのままで。静かに告げるのであった。

「行くのです。貴方の心に従って」

「私の心に」

「そうです」

また告げた。

「だからもう」

「あの、テレーズ」

夫人をその名で呼んだ。

「僕には貴女のお考えが」

「合っているわ」

そんなオクタヴィアンを突き放すような言葉を出した。あえて。

「あの娘には」

「どうしてそんな。いや」

オクタヴィアンはそれを聞いて。無意識のうちにやけになった。
そして言った。

「それならいっそのこと。しかし」

ゾフィーの方を見たがすぐに顔を戻し。また夫人に向かう。

第三幕その十

「どうしてこんな。親切な御言葉さえも。挨拶さえも」

「それはもう私からは」

「私입니다」

ゾフィーも言うのだった。

「どうしてこんなことを。私は」

「えっ、貴女は」

オクタヴィアンはゾフィーのその言葉を聞いて驚く。

「あの男爵とは」

「それはそうですけれど」

ゾフィーもそれは認める。認めはするが。

「それでも。こんなふうには」

「そうだったのですか」

「はい。恥ずかしいですし」

娘として。この騒ぎはということである。

「それに奥様が私をどう御覧になっているかわかりますし」

「ですが僕は」

ここでオクタヴィアンは。自分でも気付かないうちに決定的な行動に出た。遂にだ。

「違います。決して貴女を」

「あつ」

その手を取ったのだった。ここで。

「離しません。そして守ってみせます」

「ですが私は」

ゾフィーはそれから必死に逃れようとして言うのだった。

「お父様のところへ」

「ですが僕は」

オクタヴィアンも引き下がらない。

「貴女を誰よりも。何よりも」

「御口では何とでも言えるでしょうが」

「愛しています」

次の決定的なものであった。

「今それを貴女に告げます」

「それは本当ではありません」

ゾフィーはオクタヴィアンのこの言葉も拒んだ。言葉のうえでは。
「ですからもう私は」

「いえ。本当です」

オクタヴィアンも退かない。己の心に素直になっていた。だからこそであった。

「貴女は私の全てです。何があろうとも」

「忘れて下さい」

「私の想いは貴女にだけ」

また言う。

「貴女の笑顔を見ることを望んでいるのです」

「今日か明日か明後日か」

夫人はそんな二人を見ながら独白する。誰にも知られることなく。
「わかっていた筈。誰にも一度は来るこの日を。けれど私は」

悲しい。何かが壊れ死んでいき二度と戻ってはこないことを感じていた。寂しさと悲しさと共に。その中で彼女一人で呟くのであった。

「ああ、どうしようか」

「忘れて下さい」

二人のやり取りは続いていた。

「どうしても言葉がうまく出ない」

「忘れて下さい。貴方には」

「うっ……」

彼女もわかっていたのだ。オクタヴィアンのことを。それを言われるとオクタヴィアンはついつい夫人の方を見てしまう。しかし夫

人はその彼に対して。ただこう言うだけだった。

「どうしてそう迷っているの。迷うことはないのに」

「何故そのようなことを」

「お顔を見ていれば」

言葉はあえて他人行儀にしていた。オクタヴィアンを突き放すように。

「わかりますわ」

「僕は……」

「私も」

ゾフィーも夫人に対して言う。自分が今どれだけ取り乱してしまっているかわかっていたから。

「ああしたことがありました。けれどそれは」

「僕はそれなしでも貴女を」

「貴方には感謝はしています」

彼女もまた。言い繕うだけであった。

「ですが。それは」

「それでも僕は」

「貴女と伯爵様を」

夫人はここではゾフィーに声をかけた。

「はい」

「一緒に家へ送らせて頂きましょう」

「えっ……」

「それは……」

あまりにも直接的な言葉であった。二人はすぐにわかってしまった。

第三幕その十一

「貴女の御気分のことは」

「ええ」

話しながらまたオクタヴィアンを見やる。

「この私の従弟が知っております」

「この方がですか」

「そうです。ですから私はもう」

「マリー＝テレーズ」

オクタヴィアンはその彼女の名を口にした。何故か。そこにはこれまでのような深いものは消えていた。表面上の儀礼的なものになろうとしていた。そんな言葉であった。

「貴女は。そうして」

「何でもありませんわ」

口では言う。心を押し殺して。

「私が誓ったことは彼を正しい仕方であつて愛すること。だから彼が他の人を愛そうともその彼を愛そうと。けれどこんなに早くその時が来るとは思いませんでした」

「・・・・・・」

二人は夫人のその言葉の前に沈黙してしまった。夫人の言葉はさらに続く。

「この世にはただは無しを聞いているだけでは信じられないことが多くありますわ。けれど実際にそれをその身に受けた人は信じることができなければならない」

それが人であるのだ。

「ここに彼がいて私がいて。そして彼女が。彼は彼女と幸せになるでしょう。幸福という言葉をよく知っている多くの人達と同じように」

「何かが来て何かが起こったのか」

オクタヴィアンも独白する。

「それでいいのか。僕は聞きたい。けれど彼女はそれを許さない」
夫人を見て呟く。

「何故こんなに震えているんだろう。何か途方もない過ちを犯してしまったのか。そして同時に僕は彼女を見詰める」

その彼女は。

「ゾフィー」

その名を口にした。

「僕は貴女を見詰める。貴女だけを。これは貴女を愛しているということなのだろうか」

「教会にいるような心の中」

そしてゾフィーも。独白していた。

「敬虔で何処か不安な心の中。不浄なものもある」
静かに揺れ動いていたのだ。

「自分の気持ちが変わらない。あの方に対して跪きたくもあり怒鳴りたくもあり。どうしてこんな気持ちなのかしら」

はつきりとはわからない。しかし心はさらに揺れ動くのであった。
「私には彼女が私にあの人を与えて下さるのがわかるし彼から何かを奪うことも感じている」

相反していた。完全に。

「全てを知りたいとも思い知りたくもないとも思う。問いただしたいけれどそれを否定もしたい。暑くもなれば寒くもなってしまう」
どれもこれも反対のものだった。まるで合わせ鏡の世界の様に。
何もかもが。

「けれど。ただ一つ確かなことは」

オクタヴィアンを見る。それは。

「あの方だけは。やっぱり」

「貴女だけしかない」

ここでオクタヴィアンは。ゾフィーにまたこの言葉を告げたのだ。
った。

「何度も申し上げます。ですから」

「夢なのでしょうか。貴方と一緒に」

「貴女だけが心に残り他のことは消え去り」

オクタヴィアンの言葉は続く。

「一つの宮殿の中に貴女がいて私は人々にその中に導かれ幸福の絶頂に導かれた。素晴らしい人達によって」

「私は不安で仕方がない」

ゾフィーもそれに応えて言う。

「天の入り口に立った時の様に。今にも倒れてしまいそう」

「僕の側に倒れて下さい」

「・・・・・・はい」

オクタヴィアンの中に抱かれた。全ては。これで完結したのだった。

「おや」

そこにファニナルが出て来た。少し休んで楽になり部屋に戻って来たのだった。彼は夫人のところにやって来て娘達を見て声をあげたのだった。

「若い人達はこうしたものなのですか」

「そうなのです」

夫人は静かに彼に答える。そして。

「去る者は。音もなく」

「そうですね。では私は」

まずは彼が去った。いなくなったのを見てから夫人もまた。愛し合い抱き締め合う二人にそっと背を向けて去るのだった。音もなくカーテンコールもなく。ただ一人去るのであった。

二人は夫人が去ったことに気付いていない。暗くなった部屋の中で誓い合っていた。

「貴女だけを感じて。一緒にあることを感じて」

「夢ではない。この幸せは」

二人で言い合う。抱き締め合いながら。

「私達が共にあることを。私の中にあるのは貴女だけ」

「こうして。永遠に共に」

「そう、永遠に」

それを二人で誓うのだった。その闇の中に消えていく。あとに残ったのはハンカチだけであった。それは元帥夫人の白いシルクのハンカチだった。だがそれを何処からか戻って来たアの黒人の少年が拾って走り去ったところで部屋は完全に暗闇の中に消えた。そうして静かにその中で舞台が終わったのであった。何かが永遠に戻らないことをその闇の中に隠しながら。静かに終わったのだった。

薔薇の騎士

完

2008・3・1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8622h/>

薔薇の騎士

2011年4月28日00時57分発行